

# ニクソン訪中後の米中関係

## (1972-74年)

石 井 修\*

- I はじめに
- II 米国にとってのデタント
- III 1972年の米国外交
- IV キッシンジャー訪中(1972年6月)
- V 米中間の複数チャネル
- VI キッシンジャーの対日不信
- VII キッシンジャー訪中(1973年2月)
- VIII 連絡事務所(LO)の設置
- IX 核戦争防止(PNW)協定
- X 朝鮮半島問題
- XI キッシンジャー訪中(1973年11月)
- XII 中国の世代交代
- XIII おわりに

### I はじめに

米中関係は1972年2月のニクソン訪中によりピークに達したが、翌年には早くも隙間風が吹き始めた。“ハニムーン”は終るべくして終わった。

しかし、この関係冷却化には、米ソデタントという厄介な要因があったことも無視できない。本稿の意図はニクソン訪中後の米中関係の推移を米ソ関係にも留意しながら、考察することである。

---

『一橋法学』(一橋大学大学院法学研究科)第12巻第3号2013年11月 ISSN 1347-0388

※ 一橋大学名誉教授

## II 米国にとってのデタント

1960年代からの国際環境の変化と、米国の国力の相対的低下は、“ニクシンジャー”<sup>1)</sup>をして、対ソ・対中デタントへと向かわせることになった。ヴェトナム戦争の泥沼化などで露呈された覇権国・米国の“手の広げすぎ”を是正しながら、あくまでも米国の優位性を失わずに、ニクソンが「平和の構造」(structure of peace)と名付けた“永続的な世界秩序”を創出する試みが、対ソ対中へのデタント政策となって現れたのである。

ニクソンは、国際社会を序列的に捉え、それに対応する外交政策上の明確なプライオリティーを描いた。ニクソンのメモ<sup>2)</sup>には以後、次のことにのみ注意を払うよう指示している。(1)東西関係、(2)対ソ政策、(3)対中政策、(4)対東欧—東西関係の頂点に影響を与える限りにおいて、(5)対西欧、しかしNATOや主要国が影響されるときのみ、と書かれている。

このメモから窺われる限りにおいて、ニクソンは「平和の構造」を掲げながら、依然として東西冷戦構造を頭に描いていたことが明瞭に読みとれる。従って、いわゆる“デタント”政策も米ソの対立・分断構造を大前提としながら、この構造を転換させる(=冷戦を終わらせる)のではなく、出来る範囲内で、安定化へと向かわせようとする試みであったと言えよう。先走って言えば、冷戦最前線にあった欧州での戦争(たとえそれが偶発戦争であったとしても)の発生をまず封じ込め、米ソせめぎ合いの舞台を欧州の外、とくに“第三世界”と呼ばれるようになった地域に転置させようとするものであった。しかも、第三世界を含めたグローバルな規模で、ソ連、中国の行動を抑制し、予測可能性を高めようとする試みでもあった。しかしこの米国の試みはソ連のアフリカなど第三世界での冒険的行動により破綻していく。

“ニクシンジャー”のデタントの目標は、2つの共産主義の巨人であるソ連と中国を“革命的勢力”から“正統的勢力”<sup>3)</sup>へと変身させ、国際社会に共通の利

---

1) Hoff (1994) などが使っている

2) Nixon to Haldeman, Erlichman, and Kissinger 3/2/70 Staff Member and Office Files. Quoted in Nelson (1995) 171 fn (31)

益を見出し、積極的に関与していく、今日言うところの“ステイクホルダー”にしていくことだった。そのための手段として、中ソ対立を容赦なく利用し、双方を競わせながら、米国に協調させようとするのであった。

しかし、ひとつの困難は、米国内に対ソデタントや米中和解を受けいられない保守派が存在したし、穏健派も2分され、対ソデタントを優先するグループと、“ニクシンジャー”の対中和解を支持するグループとがあった。またソ連、中国内にも対米強硬グループ（とくに軍部）が存在したことである。

より大きな困難は、中ソ両国を米国に有利な方向へ誘導する、いわば“操縦”、というアクロバットの「三角外交」の高等戦術のむずかしさであった。この綱渡り外交をキッシンジャー補佐官が実務レベルで実践することになる。かれはこの「三角外交」を自負とも自信過剰ともとれる次の言葉で表現した。

両方の首都に細心の注意を払いつつ、われわれはわれわれの茅台酒とわれわれのウオッカを飲み続けることが出来ねばなりません。……しかし、これはむずかしいバランスとりの行為であり、われわれに困難な選択を迫ることになるでしょう。……かれ〔ブレジネフ書記長〕を満足させ、同時に周〔総理〕を不快にさせないことは、大きなチャレンジとなるでしょう……<sup>4)</sup>

### Ⅲ 1972年の米国外交

1972年。世界政治の舞台はめまぐるしく動いている。ヴェトナム戦争は依然、継続していた。欧州に目を向けると、西独による旺盛な東方外交とそれに起因した4か国ベルリン協定の調印と東西両独基本条約の調印。CSCE（全欧安保協力会議）やMBFR（均衡のとれた東西ヨーロッパの相互兵力削減）も交渉へ向って始動が見られた。

米国の動きは、ニクソンの訪中と訪ソに象徴された対中接近と対ソデタントお

3) Kissingerが*A World Restored* (1962)のなかで展開した議論も参考にした（とくにpp1-2, 144-145）

4) Memorandum for the President from Kissinger 3/2/73 “My Trip to China” (p.22) HAK China Trip—Memcons & Reports (Original) Feb 1973 Country Files—Far East Kissinger Office Files Collection Box 98

よび、ヴェトナム戦争収束への努力が目立った。前年の印パ戦争はこの年に正式に終結した。日本とそれに続いて、西独、オーストラリア、ニュージーランドが中国との国交を樹立した。

こうした背景のなかで、キッシンジャーの超精力的な外交活動が際立った。まさに“米国外交の顔”になったと言っても言い過ぎではなかろう。大統領は訪中、訪ソでマスコミを賑わしたが、その後は、11月に控えた大統領選挙のための遊説、選挙後にはウォーターゲイト事件に振り廻されることとなり、本来得意であるはずの外交の後景に引かざるを得なくなった。

キッシンジャーとは言えば、2月に大統領の訪中に同行し、その全ての会談に顔を出したばかりか、共同コミュニケ作成に身を削った。4月に隠密の訪ソ、5月に大統領の訪ソに同行、6月にそのブリーフィングのために訪中。8月にはパリでの北ヴェトナム側との秘密の和平交渉。その帰途来日。その10日後にハワイでの日米首脳会談に同席。9月にまた訪ソ。

パリでの公式会談とは別個の同じパリでの北ヴェトナム代表との秘密交渉は69年夏に始まって以来、断続的に行われており、キッシンジャーはその秘密会談の米国側の交渉者だった。その間、南ヴェトナムのサイゴンでチュー（Nguyen Van Thieu）大統領の説得にもあたった。キッシンジャーは帰国するたびに、ニューヨーク市の密会場所に頻繁に赴き、中国側との裏チャンネルでブリーフィングや会談も行った。

#### IV キッシンジャー訪中（1972年6月）

1972年2月の訪中の後、ニクソン大統領は5月にモスクワを訪問。ブレジネフ（Leonid Brezhnev）書記長との間で、SALT I（戦略核兵器制限暫定協定）とABM（迎撃ミサイル制限条約）とを締結した。そしてあまり世間の注目を集めなかった「関係の基本原則に関する米ソ宣言」（The Declaration of the Basic Principles）も署名された。「平和共存」と相互不戦を謳ったもので、一片の紙切れと片付けることもできようが、冷戦史上、画期的な文書だったと位置付けられることもある<sup>5)</sup>。

ニクソン訪ソのまえにブレジネフはキッシンジャーによるモスクワ秘密訪問を強く望んだ。これは、ニクソン訪中に道を開いた1971年7月のキッシンジャーのパキスタンからの北京への隠密行と同等の対応をブレジネフが米国側に求めたからに他ならなかった。

5月にニクソン大統領の訪ソが終ると、キッシンジャーは6月に4度目となる訪中をする。中国の周恩来総理にブリーフィングするためであった。それとは別に、ニューヨーク・マンハッタンの密会場所に忙しいスケジュールを割いてキッシンジャーは中国側の裏チャンネルと接触し、ブリーフィング、会談なども行った。中国への気の遣いようが窺われる。

6月19日から23日までキッシンジャーは北京に滞在し、帰国後の27日に、16頁のメモランダム の形で大統領あての報告書を作成した。公開された北京での会談議事録と突き合わせても、内容を正確に伝えているばかりでなく、重要な点を摘出しているので便利である。

ここで、この報告書<sup>6)</sup>と会談録<sup>7)</sup>とでキッシンジャーの6月訪中を吟味したい。本会議録のうち2時間半にわたった葉剣英共産党軍事委員会副主席との会談の内容は非公開とされている。前回と同様に、キッシンジャーによるソ連に関する軍事情報の提供と、インドシナ情勢についての意見交換があったと推測される。

ニクソン夫妻訪中が米中和解を華やかに演出したものであったとすれば、その後の2国間関係がアンチ・クライマックスとなったのは自然の成り行きであった。周＝キッシンジャー会談は、どちらも特定のアジェンダを欠いたまま、会話がさまざまなトピックの間を散漫に行きつ戻りつした観は否めない。キッシンジャー

5) Lynch (1992) は「冷戦は2度終わった」を意味する表題の著書で、「基本原則」の調印が1960年代以降の米ソの暗黙の行動規範を成文化したことの重要性を強調した (p. 30.)。テキストの主要部分は同書 pp175-177 に収録されている。また p. 42 fn (4)も参照

6) Memorandum for the President from Henry A. Kissinger "My Trip to Peking, June 19-23, 1972" June 27, 1972 TOP SECRET/SENSITIVE/EXCLUSIVELY EYES ONLY Box 851 For the President's Files (Winston Lord) —China Trip/Vietnam 以下、本稿の史料はすべて NSC Files のものである

7) Memorandum of Conversation Participants: Prime Minister Chou En-lai……Dr. Henry A. Kissinger, Assistant to the President for National Security Affairs, Winston Lord, NSC Staff TOP SECRET/SENSITIVE/EXCLUSIVELY EYES ONLY BOX 851 同上ファイル

はその回顧録でそれまでの訪中とは違って、半頁しかスペースを割いていない。周との公式会談が14時間（半分が通訳に費やされたことに留意する必要がある）。それに、2度の晩餐会、周とのクルマの同乗、夏の離宮（頤和園）での舟遊び、などでの6時間ほどの「非公式の（しかし内容のある）会話」が加わる。

キッシンジャーは「これまでの周との会談では最も広範囲のもの」と形容することは間違いではないが、必ずしも中味の濃さを示すものではなかった。4回目とあって、周とはすっかり気心も知れており、今回は時間的切迫感が欠如していたこともあり、打ち解けて、哲学的、歴史的レヴェルの話やリーダーシップ論にまで会話は広がっていった。ただ、ヴェトナム問題をめぐっては、米国の空爆が続いており、厳しいやりとりも見られた。

前3回の訪中ではキッシンジャーが昼夜を分かたぬ仕事漬けの毎日だったことへの周の配慮からか、今回は観光や視察も日程に多く盛り込まれた。

随員には、国務省、NSCから数名加えられたが、キッシンジャーの出席する会談にはロード（Winston Lord）のみが同席を認められ、ノートテイカー（そして帰国後の会談録作成）の役割を果たした。

キッシンジャーの報告書のなかで、最も注目すべき箇所は「この1年で、中国は敵対的姿勢から暗黙の同盟（tacit alliance）へと大きく動きました」と規定していることである。確かに、対ソ認識で一致点はあったものの、後述するように、これはあくまでキッシンジャーの個人的、主観的判断（あるいは単なる願望）であり、中国側（とりわけ毛沢東）は、そのようには必ずしも認識していなかったのである。実は中国側の米国への警戒心はいまだ完全には解かれてはいなかったと思われる。

### 〈ヴェトナム〉

ヴェトナムについては、これまでで初めての突っ込んだ議論が行われた。中国は北ヴェトナム〔以下「北」〕に情動的に傾斜し、また、政治的に、「北」への義務感とそのことを明白にしておく必要性を感じている一方で、中国はソ連とともにヴェトナムを米国との2国間関係の障害物とすることを望んでいない。ただし、「北」に対して分別をもって振舞うように圧力をかける意志のないことにおいて、

中国はソ連以上である。

ヴェトナム戦争はまだ收拾がつかなくなる可能性を残している。周はキッシンジャーに対して、穏やかな言い廻しではあったが、米国が「北」への爆撃や海上封鎖を止めるよう求めた。また周は、米国が完全撤退したあと、戦争が再燃することも恐れていた。

もともと対中封じ込めの性格を有したヴェトナム戦争は、米中和解により無意味化、周辺化され、「北」は孤立感に苛まれることになる。1972年2月21日、春節を祝うパーティがハノイの中国大使館で催された。驚いたことに「北」の招待客はひとりも姿を現さなかった。実は、この日はニクソンの北京入りの日でもあったからである。

今回のキッシンジャーの訪中は『人民日報』などの一面トップで報道された。「北」の孤立感は一層深まったであろう。

ヴェトナム戦争との関連で、米軍機や艦船の中国領空・領海への侵犯が続発した。周も具体的データをキッシンジャーに示して、この点を指摘した。しかし、毛の指示により、侵犯問題は表沙汰にせず、話し合いはニューヨークの秘密チャネルに任せることとなった。

ヴェトナム問題で周とやり合う場面が続いたあと、たまりかねたキッシンジャーが「われわれは北京でヴェトナムの話で多くの時間を使うべきではない（周笑う）」といった個所が会談録に残されている。

### 〈中ソ間の敵愾心〉

周はブレジネフを「新たなツァーリ」、葉はソ連を「狂信的膨張主義者」と形容し、「北の隣国」への敵意を剥き出しにする。キッシンジャーは、前年7月（キッシンジャーの秘密訪中）のとき以上に激しくなっていると観察した。

ところが、ソ連の中国に対する不信感にも異常なものがあった。「ブレジネフは中国人に対する憤りを吐き出した。「かれの怒りには人種主義的響きがあり、人種偏見さえ窺わせるものだった」「毛は油断も隙もならない奴だ」と言った、など、とキッシンジャーの回顧録に記されている。ブレジネフは、中国が核兵器でソ連に10年で追いつくと信じていた、とニクソンは回顧録に述べている。

1969年3月初めの中ソ武力衝突を知らせる電文を手にしたソ連のマリク(Yakov Malik) 国連大使は怒りに震えて口走った。われわれは、「細い眼の野郎どもに……決して忘れられないような教訓を与えてやる……黄色い奴らを殺しまくってやる。」そのあとあらゆる雑言、軽蔑語を使ったが、ロシア語はその点事欠かなかった<sup>8)</sup>。ドブリニン駐米大使は、2超大国が中国を封じ込める時間はまだ残されている。しかし、2国のパワーも長続きはしないと述べた。米ソ合同で中国の核施設を破壊しないかとソ連が米国に話を持ちかけてきたのもこの頃である。

1972年6月のキッシンジャー訪中のときのこと。

周——1955年にソ連と西独が国交を樹立したときに、フルシチョフはアデナウアーに「中国人は恐ろしい人間だ。黄色い大群 (the Yellow Horde) が侵略に舞い戻って来る」と言いました。

キッシンジャー——そのことで、アデナウアーは中ソ対立を信じたのですね。

周——私はそのとき外相でした。

### 〈米ソデタントへの中国の猜疑心〉

1972年4月のキッシンジャー秘密訪ソ、そして5月のモスクワ米ソ首脳会談において特徴的なことは、キッシンジャーがくり返し中国側に明かしているように、ソ連が米国との間に出来るだけ多くの条約、協定の類を結ぼうとしたことだった。

SALT や ABM 制限条約はもとよりのことだったが、「関係の基本原則に関する米ソ宣言」についても中国は憤慨した。第1項や2項で米ソの平和共存を文章化し謳い上げていることは世界にとって好ましいことだった。しかし、米ソのデタントそのもの以外にも中国にとってとくに不快だったのは「米ソは世界の国ぐにの内政についても特別の責任を有する」と述べた第3項だった。周が、「これはあたかも2つの大国が世界政治を独占しているかのようだ」と怒りを表したことに、キッシンジャーは「われわれは condominium (世界の2国による共同管

---

8) Shevchenko (1985) 217



理) をするつもりはない」と否定に懸命だった。「基本原則」にはソ連への配慮から人権条項が盛り込まれなかった。

ほかに、偶発戦争防止条約やNPTに他の国々が加入するよう、米ソ共同で呼びかける共同コミュニケにも中国は反撥した。中国はこれらへの加入を拒否していた。キッシンジャーは、これは、明らかに、まず中国、そして、英仏に向けられたものであることを周に対して認めている。

「基本原則」に並んで、中国が強い反撥を示したものに「ソ連と米国との間の核兵器不行使条約」をソ連が米国に対して提案し、同調を求めている事実である。翌73年6月後半にブレジネフの訪米による首脳会談でこの条約は調印された（6月22日）。この条約は「核戦争防止協定」[以下、PNWと省略]とも呼ばれる<sup>9)</sup>。この問題は、周とキッシンジャーとの会談でよりも、後でみるように、ニューヨークでの裏チャンネルの会談でより頻繁に取り上げられ、中国側はこの“条約”を激しく攻撃している。ここでは、キッシンジャーの周への説明のみを紹介しておく。

このことはまだ極秘扱いの段階だ。[ソ連側の]提案はわれわれお互いに対して核兵器を使わないと合意することだ。われわれ[米国]の非核の同盟国その他への[ソ連の]攻撃を許すものではない、とわれわれは述べた。われわれ[米国]は[依然として]核兵器を使用する権利を保留する。通常兵力によって侵略されてはならない地域が世界のなかにあるからだ[西欧のNATO同盟国はソ連を盟主とするワルシャワ条約機構軍の圧倒的な陸上兵力には戦術核でしか対抗できないと認識されていた]。われわれは力の行使を否認することはできる。しかしわれわれはその安全が決定的に重要と考えている地域へ勝手に攻撃を加えることを認めるような協定に署名することは極めて困難だ。世界のどこでも[第2の]チェコスロヴァキアが起ることを受け入れられない。

中国側にとってみれば、この条約ないしその提案国・ソ連は「羊の皮をまっ

9) Kissinger (1982) 274-295 に記述がある。Garthoff (1994) 376-395 が詳しい説明をほどこしている。Tyler (1999) 146, 158-59, 442 註 107 および Barnett (1983) 315, 322 なども言及している。偶然かどうかは判然としないが6月22日は1941年にドイツがソ連に進攻をした開始した日付だった

で狼」だった<sup>10)</sup>。ブレジネフは、中国の核開発は10年でソ連に追いつくとみており、それを喰い止めたかった<sup>11)</sup>。ブレジネフはまた“米中同盟”が存在するのではないかと疑っていた。

ついでながら、ニクソン大統領は回顧録のなかで、この協定をソ連が提案したことに触れて、「このことを知れば、NATO 同盟国やイスラエルや日本など、米国の核の保護に頼っている国は恐慌状態に陥るだろう」と記している<sup>12)</sup>。米国側は署名するにしても、この条約を具体性の乏しい（中身の無い）、概念的なものにしたいと考えた。

ソ連の提案が世間に知れたのは1972年の後半だった。

「核兵器防止条約についての発表」（日付なし）

1. 大統領はこの問題についての検討を考慮している。
2. そのような検討はとくに次の点に留意されたものでなければならないと考える。
  - (a) 米ソ2国による〔世界の〕共同管理と受け止められるような形はとらない
  - (b) 米ソ2国間では核戦争をしないが、第3国への核攻撃のオプションを残しているとの含意は排除されるべし
  - (c) 核戦争防止に重点を置くあまり、通常戦争を始めるのは正当であるかのような印象を与えるべきではない
  - (d) 平和と安全を守ることを目的とするこれまでの同盟や他の形の義務は対象外とする

### 〈日本その他〉

#### 日本について――

昨年7月以来、中国の対日観が著しく変化した。当初は日本軍国主義や日米安保の危険性をしきりに口にしていた。しかし、いまでは、安保が日本に対する最善の抑制（best check）だとする米国の主張を受けいれるようになった。

---

10) Tyler (1999) 146 の表現

11) Kissinger (1982) 295

12) Nixon (1978, 1990) 881

台湾への言及はほとんど無かったが、米日が共同で台湾防衛をすることを非難した。

本官 [キッシンジャー] の日本についての見方 —

- (1)対ソ — シベリア開発
- (2)東南アジア — 経済で積極的に進出している
- (3)対米 — これまで同様の結びつき
- (4)対中

この本官の見方に周は同意した。

本官：日本は流動的 (volatile) であり、この傾向を煽らないように努めるべきである

周：同意

米中双方とも対日関係では抑制 (restraint) を働かさなければならないことを本官は強調した。もし、日本のことで、米中が競争 (compete) することになれば短期的には米国が優位に立つが、最終的には、日本のナショナリズムを強めることになる。

周は、日本は [いま] 十字路 (crossroads) に立っている、まだこれからの進路が決まっていないと表現した。周はこの “crossroads” を何度か繰り返している。

**韓国 —**

周：日本軍をここから締め出すために米国はここにしばらく兵力を維持すべきである。

**東南アジア —**

周：[米中間の] 暗黙の協力関係 (tacit cooperation) は、ソ連やインドから来る圧力に対抗するうえで必要だ、

**南アジア —**

中国のインド嫌い [1959年8月の中印戦争など]。ソ連の対中包囲網にインドが使われているのではないかと懸念している。インドの圧力から独立パキスタンを支援せねばならない点では、亜大陸での米中の利害は一致している。中国はパキスタンに軍事援助を行っている。

キッシンジャー：インドはバングラデッシュで騒擾を画策しているのではないか。

**結論**——キッシンジャーは報告書の結論部分を次のように結んだ。

中国は米国を必要としている。しかしながら、もし米国が中国の期待に応えられなければ、——つまり、ソ連の力と意志への [米国の] 決然たる対抗姿勢 (a resolute counter) を欠くならば——かれら [中国] はわれわれに残忍に立ち向かって来るだろう。かれらは手強い敵対国となりうる。

留意すべき点——

- ヴェトナム [戦争] はまだ収拾がつかなくなる可能性がある
- [米軍機の中国領空への] 侵犯に対する中国側の抗議は米中2国間の摩擦を最小限に止めるためにおおびらにしないよう毛主席は命じている。
- 大統領閣下の書かれた記事が中国の不興を買ったこと。 *US News and World Report* (6/22/72) の記事のなかの同じ頁に the “People’s Republic of China” と the “Republic of China” の2つを同時に使用したことは、北京側は、[米国が] 「2つの中国」論をとっているのではないかとの疑念をもたせた。中国はこの不満をくり返した。
- 周は、両国は国交正常化に向けていま以上に努力すべきであると、強く印象づけようとしている。

## B 会談録

キッシンジャーから大統領にあてたメモランダム形の報告書の概要は以上の通りであり、かなり会談の内容が正確に反映されているうえに、キッシンジャーが重要だと感じたポイントが強調されていることなど、ニクソン訪中後の米中関係を映し出す貴重な史料である。

次に、6月19日午後から23日未明にかけて行われたこの実際の会談のなかで、重要と思われる個所や、日本人として関心ある部分を摘記したい。

## 日本問題——

到着日(19日)午後の会談は、周とキッシンジャーの散漫な会話に終始するが、日本が主たるテーマとなった。『ニューヨークタイムズ』のようなマスコミ、ライシャワー(Edwin O. Reischauer)ハーヴァード大学教授をはじめとするオピニオンリーダーは、キッシンジャーを日本軽視、中国優先の政策(“a China-first policy”)を遂行していると批判していることが、まず話題となっている。

キッシンジャー——安保条約を廃棄した場合の日本は、遅かれ早かれ、ナショナリズムに立って再軍備するだろう。いや、安保があっても再軍備するかもしれない……非常に揺れやすい(volatile)国だから(周頷く)。日本は4つのバラバラの方向に進もうとしているように思われる。

(1)自分たちを打ち負かした国である米国への魅力(日本はかつて負けたことがなかったから)。それに経済的考慮。(2)感傷的、歴史的な中国への愛憎の入り交じった気持ち。(3)東南アジアへの大東亜共栄圏づくり。(4)ソ連の誘いによって、シベリアに注目。これらが、同時に作用している。

周——日本はいま十字路に立って、どちらに進むか判断に迷っている、と考えている。

キッシンジャー——総理と同感です。

次に日本について語られるのは、帰国を前にした22日午後だった。前日の西独についての会話を引き継ぎながら、キッシンジャーは日本とドイツの相違を強調する。

「日本は第2次世界大戦で物理的な破壊を受けただけで、精神的には変わらないままである、と私は信じる。従って、私は総理と同意見であり、現在のところ顕著でないが、日本がある方向[ナショナリズム、膨張主義など]に向う可能性は大いにあると思う」。(同日、少し間を置いて、指導者論となる。それも日独比較の視点からなされる)。

キッシンジャー——……苦難の歴史を味わわない国は偉大な人物を生み出さない。キッシンジャー——「ドイツ経済が発展したためドイツではもはや偉大な人物は生まれない(ビスマルクやドゴール、アデナウアーを偉大な人物と看做すた

め)。」

周——「……日本は私たち二人とも不安を持つ国だ、日本人は地理的環境も手伝って、団結 (unity) を保とうとする。しかも日本の歴史において、かれらは外国人に完全に占領されたことはなかった……」

キッシンジャー——「……日本は偉大な人物を生み出さない。いまの指導者たちを見てください。一匹の蟻を見てそれが立派かどうか問うているようなものです」。

周——「しかし、蟻も集団になると、とても強力になる」

キッシンジャー——「日本の強みは社会的凝集性にある」

周——「中国南部の蟻はすごい。山を造ってしまう。木の根元に住処を造ってしまう……」

キッシンジャー——「私は、日本人は [全体としては] 立派だと言っているのだ。[しかし] ひとりの日本人と話したときには何の感銘も受けない……」

周——「蟻には女王蟻がいるんですよ (周、自分で笑う)。どんな国でも指導者がいる」

キッシンジャー——「はい。しかし、日本人はその女王蟻を頻繁に取り換える (笑)」。

このようにキッシンジャーの日本の指導者についての評価の極めて低い。

キッシンジャーは別の会談で、今回もまた日本人 (政治家、官僚) の口の軽さ、リーク癖を持ち出して、周を笑わせている。5月の米ソ首脳会談の準備のためキッシンジャーが4月に極秘にソ連へ飛んだが、「私は [ニューヨークの] 貴国大使には事前に知らせたが、日本の大使には知らせなかった (笑)」。

キッシンジャーは、日本には核武装をさせない、朝鮮半島に日本軍を入れないなど、と周の不安を打ち消す発言をしている。また、日中関係改善には反対しないことを明確にしながらも、米中間で「競争」は止そうと呼びかけている個所が各所に見受けられる。

周は一度だけ尖閣に言及したが、深入りしなかった。

22日深夜の会談では、次のような発言もしている。

キッシンジャー——日本は至るところに——シベリアからタイまで——投資を

しようとしている。

キッシンジャー——かれらは大東亜共栄圏をドルで買おうとしている。この発言はニクソンの「日本人はアジアにしらみのようにウジャウジャしている」の言葉を思い起こさせる。

### ドイツ問題——

日本が出たついでに、ドイツに関する会話を拾い上げてみる。

周もキッシンジャーも「ドイツ」(Germany)という語を多用し、必要のない限り、「西独」「東独」の区別をしていないのが興味を惹く。

以下は、キッシンジャーの意見である。ドイツには日本に似た非常に強いナショナルリステックな傾向がある。しかし、ドイツの社会構造には日本の持つ凝集性、力強さ、自信もない、ここでドイツの進む可能性のある3つの方向をキッシンジャーは提示する。

(1)EC(欧州共同体)に加盟し、そのメンバーの一員として動く、(2)フィンランド化、(3)ナショナリズムに走る(この場合、共産党ですら同様だろう)。ドイツはもはや戦後の経済復興だけでは満足できず、精神的、心理的問題を抱えている。

これに対し、周は(2)のフィンランド化の可能性はない、と反論する。しかし、キッシンジャーはあくまでもこの可能性にこだわりを見せ、SPD(東方外交を進める西独の社会民主党)はモスクワの善意をあまりにも頼りにしているからだ、と再反論している。

これとは別に、周——1971年7月16日(中国時間)の[ニクソンの訪中]発表のあと、グロムイコ(Andrei Gromyko 外相)は慌てて東ベルリンへ飛び[ベルリン4か国協定の]交渉で素早い譲歩をみせた。

## V 米中間の複数チャネル

ニクソン大統領は訪中したが、未だ国交を持たない米中両国は、連絡や会談のためにさまざまなチャネルを利用した。

そのなかで、一番公式ルートに近いものは「パリ・チャンネル」だった。パリの米中両大使館で連絡をとり合うルートである。しかし、ここでもワトソン (Arthur “Dick” Watson) 米駐仏大使を通すルートと、ウォルターズ (Vernon A. Walters) 少将 (米駐仏大使館付武官) を通ずるルートがあったと思われる。前者は、やや公式ルートに近いもので、後者は完全な秘密チャンネルだった。前者の活動は、パリの米大使館とワシントンの本省との間のやりとりなどに垣間見られる。

ついでながら、ワトソン大使は1972年秋までに辞意を表明していたし、ウォルターズ少将はCIA副長官へ栄転することになっていた。ウォルターズはパリの中国大使館の幹部と45回もの密会を重ねていたようで、お互いに友情に近いものを感じ合っていたことが想像される。45回目の会談 (3/5/72) の詳細な記録の3月23日付メモランダム<sup>13)</sup>によれば、この日は中国側によるウォルターズのための送別会が中国大使館内で催された。14コースもの晩餐会のなかで、お互いに“my friend”と言う言葉が行き交っている。このあとは、ワトソンが中国側との接点となることを3月10日付で公表した模様である (この件に関しては、ニクソン訪中時に両国で合意されていた。ところが、ウォルターズの役目は米大使館付武官となったグウエイ (Georges R. Guay) 空軍大佐に引き継がれたようで、キッシンジャーのヴェトナム秘密和平交渉の手伝いをしている。また臨時代理大使のキュビシュ (Jack B. Kubisch) も黄鎮・中国駐仏大使に会ったりしている。

もうひとつはニューヨーク市内での秘密の接触である。これにも2通りのチャンネルがあった。中国がニューヨークに置いていた国連代表部にあまり顔を知られていない人物がホワイトハウスから出向いて行き、文書の手渡しや受け取り、口頭でのステートメントを聞いて来ること (そして、これをメモランダムに残しておくこと) であり、逆に、中国側がワシントン D.C. に出向くことはありえなかった。

もうひとつは、ニューヨーク市内の“秘密場所”で黄華 (Huang Hua) 中国

---

13) Memorandum for the Record (by Walters) “45<sup>th</sup> Meeting with the Chinese-Paris, 5 March 1972 SECRET/SENSITIVE Box 849 同上ファイル



国連代表(大使)とキッシンジャーが、そして止むを得ぬ場合は、ヘイグ准将が会合を持つという裏チャンネルであった。この秘密会合にはロードが出来るだけ出席し、メモランダムを作成した。ヘイグではなく、ハウ(Jonathan Howe)海軍中佐もキッシンジャーの代理出席をし、若いNSCスタッフのロドマン(Peter W. Rodman)がロードの役割を果たすこともあった。有名人となっていたキッシンジャーが中国の国連代表部へ赴くことは決してなかった。

中国代表部は72年6月にローズヴェルトホテルを引き払って、ミッドタウン・ウエストサイドのリンカンセンター近くへと居を移した。アムステルダム通り側ともなっているが、ハドソン川が近く、これまでより格段に静かで、キッチン付きだ、と喜んでいる様子が窺える。

裏チャンネルの密会場所も安アパートから、アッパーイーストサイドの瀟洒なタウンハウスへと移っている。ここに微苦笑を誘うヘイグへ宛てたメモランダムがある<sup>14)</sup>。4月24日(72年)付で「特別の場所の予防策」と題されている。内容は、新たな密会場所を探さねばならない。アパートの隣人が何事が起っているのか訝りはじめた。差し当たっては、キッシンジャーはデカイリムジンで乗り付けないこと、シークレットサービスはクルマから躍り出て、交通を遮断したりしないこと。隣人は関心を強めている。とくにキッシンジャーは日没後に到着すること、また約束時間を守ること、など挙げている。

翌73年2月に米中は相互の首都に「連絡事務所」(liaison office=LO)を設置することに合意した。中国側は、台湾が大使館を置いている米国内に外交出先機関を出すことを渋っていたが、ついに必要性を認めたようである。春には実際に事務所が設置され、中国からは黄鎮(Huang Chen——駐仏大使からの転出)が、そして米国からは、大物外交官のブルース(David K. E. Bruce)が、それぞれの初代所長として赴任することになる<sup>15)</sup>。

ただし、中国の連絡事務所がワシントンD.C.に置かれたあと、ニューヨークの裏チャンネルが、どうなったかは明らかではない(73年9月にキッシンジャー

14) Memorandum for General Haig from Jon Howe "Precautions in Special Place" April 24, 1972 TOP SECRET/SENSITIVE/EYES ONLY BOX 361 Subject Files

15) Tyler (1999) 152, 157, 162 など

が国務長官兼務となってからは、断絶したことは容易に想像できる。)

ニューヨーク市内での黄華国連代表との密会についての最初の文書は72年4月26日のものが記録に現れる<sup>16)</sup>。キッシンジャーとロードが出席できず、ヘイグ大統領副補佐官(キッシンジャーに次ぐ地位)とロドマンとが代理出席している。

4月26日の密会の主要目的はキッシンジャーの4月の隠密訪ソ(4/20-4/24)のさいの会談内容を中国側にブリーフすることが主目的だった。キッシンジャーは5月に予定されていたモスクワでの米ソ首脳会談のお膳立てをするため招待された。キッシンジャーがいまやあまりにも有名なパキスタン経由の隠密訪中をしたと同じ扱いをソ連側も求めたためであり、最初はキッシンジャーは拒絶した経緯がある。ヘイグは、(1)中国の利益を害するようなことを話し合っても、合意してもいないこと、(2)「今から話すことは、極秘情報であり閣下[黄大使]と周総理とその側近以外には洩らさないで欲しい」「どうか取扱注意願いたい。わが方の官僚も知らないことだ」と念を押した。ソ連とは、SALT, ABM, SLBM(潜水艦発射ミサイル)を凍結するか、など話し合われたことを告げた。

しかし、この会合でより大きな問題となったのは、中国領の海南島の海域に米軍機が進入したことへの中国側の4月18日付覚書に米国側が答えることであった。ヘイグは、米国の電波中継用航空機が海南島に不注意で接近したことを認め遺憾の意を表明した。

南シナ海とトンキン湾とを区切るように位置する海南島は、ヴェトナムのダナンに近く、こうした事態が起きることは十分に予想される。米中和解以前にはより頻繁に領空侵犯があったことも考えられる。ニクソンの訪中があったからこそ、米中両国はこうした事態をとりあげる関係になったと言えよう。この後も、領空侵犯や中国商船(とはいっても、軍需品を含む北ヴェトナム支援品を積載していた可能性は高い)への「誤爆」がくり返され、その度に、密会場所でも、また国

---

16) Memorandum of Conversation TOP SECRET/SENSITIVE/EXCLUSIVELY EYES ONLY Ambassador Huang Hua, Major General Alexander Haig, Peter Rodman, April 26, 1972, New York City, NSC Files, For the President's Files (Winston Lord) —China Trip. Vietnam Box 849

連代表部でもしばしば口頭で抗議されたり、抗議文を読まれ、事実調査を約し、米国側が釈明、遺憾の意の表明に追われることの多かったことが文書に示されている。

もうひとつ、マイナーなことだが、代表部の一員の怪死事件がある。ニコチン中毒による急死で、黄大使は「殺人」の言葉を使った。ブッシュ（George H. W. Bush）国連大使やニューヨーク市警など原因究明への協力姿勢を示したが、迷宮入りした。（この頃、キッシンジャーはブッシュを国連問題に限ってしか、密会には招かない、と中国側に告げた）。

「デタント」を“米ソの結託”ではないかと疑う中国に対しては、「何事も全て隠さず知らせる」姿勢を米国側は続ける。そのことが、同盟国よりも前に中国に対してはキッシンジャーの4月および9月訪ソ、米ソ首脳会談について情報の提供となった。

前述のように、米ソ間では“PNW”が検討されていたが、これに対して中国側は異常なまでの憤懣を示す。このため、キッシンジャーはくり返し「これは、米ソによる世界の共同管理（condominium）ではない」と説得しなければならなかった。

ヴェトナム問題もひとつのネックだった。中国は心情的に北ヴェトナムに肩入れしていたばかりでなく、ソ連との対抗上でも「北」への支援を続けざるを得なかった。（中国は、ヴェトナム戦争終結後にソ連がヴェトナムへの影響力を強めることを警戒していた。）

米空軍による激しい北爆に対しては、友好的な密会の最中に、やおら黄大使が抗議文を取り出して（かなり事務的な調子で）読み始める、という場面も見られた。パリ秘密会談についてもある程度米中間で情報を提供しあった。

中国側は米国に対して、日中関係改善の過程を刻々と米国側に知らせていた。一方、米国側は、キッシンジャーの訪日（8/18-19/72）やハワイで行われた田中角榮新総理とニクソンとの首脳会談（8/31-9/1/72）についてブリーフした。

## VI キッシンジャーの対日不信

キッシンジャーの対日不信と日本経済の発展への不快感が露骨に現れた文書があるので、挙げておく<sup>17)</sup>。喬冠華 (Chiao Kuan-hua) 外交部副部長 (外務次官) が国連で演説のために来紐した際、キッシンジャーはかれをニューヨーク市のセンチュリークラブで接待した。72年11月13日の夜のこと。ニクソン訪中のさなか、最終コミュニケの文言で激しくやり合った間柄である。中国側からはほかに、黄華国連大使と代表部のメンバー (で米側への通訳としての役割も持つ) Shih という女性が出席。米国側はほかに、ロックフェラー (Nelson A. Rockefeller) ニューヨーク州知事が招待され、ハイグ、ホルドリジ、ロードも陪席した。富豪として知られるロックフェラー家は大学教授時代のキッシンジャーのパトロンだった。弟デイヴィッドは銀行家である。このネルソンは1968年の共和党の予備選挙で最後までニクソンと争った人物で、キッシンジャーはロックフェラー陣営の外交問題顧問を務めた仲である。言い換えると、ニクソンは敵方の参謀を一本釣りにしたわけである。(ロックフェラー兄弟はキッシンジャーが政権に入ったあとも資金援助を続けた。) 食事中の会話はヴェトナムに始まり、ソ連、中国でのコミュニケ作成の思い出、など広範に亘った。終り近くになって、話題は日本問題に移った。

キッシンジャー——日中交渉の経過を終始、知らせてくれたことに感謝する。日本のナショナリスティックな野望を刺激しないことが両国にとっての利益だ。日本は米中のいずれかに先ず敵対し、その後、もう一方にも敵対してくるだろうから。

喬——ナチスドイツと同じやり方ですね。ナチスは一国に敵対し、そのあとでまた別の国に敵対した。

キッシンジャー——日本が〔日中国交正常化のような外交的〕実績に自信を持

---

17) Memorandum of Conversation TOP SECRET/SENSITIVE/EXCLUSIVELY EYES ONLY Ch'iao Kuan-hua, Henry A. Kissinger, Nelson A. Rockefeller, Alexander M. Haig, John Holdridge, Winston Lord November 13, 1972. Century Club, NYC, For the President's Files Box 850

ちすぎると、非常にナショナリスティックになるかもしれない。しかし、もし中国や米国などの国が、日本を穏健な方向に仕向けるならば、日本を抑えることが出来るでしょう。

喬——その点については、とてもはっきりしている。日本がかつてのような膨張と侵略の道に踏み込まないよう、両国——とりわけ米国——が努力する必要がある。

われわれは、田中、大平とこの問題を話し合った。なぜなら、もと来た道に戻るのには危険で、日本自身のためにもならない。

キッシンジャー——お互いに連絡しあいましょう。

喬——博士、米国の方が中国よりも日本に対して大きな影響力を持っているので、米国により大きな責任がある。これが率直な気持です。

キッシンジャー——まさにその通りです。もし [米中が] 互いに競争して日本を勢いづけることになれば、どちらも影響力を失う。米国は日本を穏健な方向に仕向け、中国と連絡をとり続けます。もし両国が情報を交換し合えば有益だと思う。われわれの利害には共通するものだ。

喬——日本との話し合いの内容は必ずお知らせするので安心して下さい。

キッシンジャー——これまで貴国は非常に適切だった。

喬——日本の軍国主義の復活は日本にとって良くないばかりでなく、中国や米国の利害にとっても良くないことだ、もし日本が米国や中国を攻撃するようなことがあれば、敗北に終る。

キッシンジャー——そうです。

……

キッシンジャー——政治、軍事に関しては米国がより大きな影響力を持つが、長期的には文化的な意味で中国の方がより大きな影響力をもつ。

喬——そうです。しかしこれは歴史に起因するものだ。

キッシンジャー——そして日本の物欲 (greed) によっても [この前行との脈絡不明]。

……

別に、黄大使との密会場所での会話のなかに日本を笑い種にした個所が2か所

ある<sup>18)</sup>。

72年9月8日のニューヨークでの密会でソ連との交渉事を説明したあと——  
キッシンジャー——日本の外相 [大平正芳] に会ったときに、他に10人の官僚が顔を揃えていた。10人もの官僚がいるときには私は何も言わないことにしている。

72年9月19日の密会でまたもソ連との間の交渉事について説明し——  
キッシンジャー——そのSALT交渉について発表する10月15日 前まで日本人には言わないで下さい [大使がグクスクス笑いをする]、なぜかと言えば、かれらはいつもマスコミに喋るからです。あなた方は違いますが……。

同じ会談で、キッシンジャーは黄に次のようにも語っている——  
キッシンジャー——ソ連は、中国と日本とが結託して (concert together against) 白人たち (white people) に対抗しようとするのではないか、との危惧を表明した。

## Ⅶ キッシンジャー訪中 (1973年2月)

1973年にキッシンジャーは2度にわたって訪中 (2月、11月) した。  
キッシンジャーは1973年2月7日にワシントンを出発して、11日間にわたりアジア各地を訪問した。バンコク、ヴィエンチャン、ハノイ、香港、北京、東京という旅程だったが、ハイライトは言うまでもなく北京だった。香港で48時間の休憩をとり、北京には2月15日の午後に着した。キッシンジャーにとっては、5度目の訪中となった。2月15日から19日まで滞在した。

この間、周恩来総理との会談は20時間、毛沢東共産党主席との会談は2時間近く、そのほか、晩餐会、観光の最中にも数時間の会談がもたれた。

1月7日にパリでヴェトナム和平協定が成立して間もないこともあり、キッシンジャーの毛や周との会談はすこぶる和やか雰囲気を感じさせる。周=キッシン

---

18) Memorandum of Conversation TOP SECRET/SENSITIVE/EXCLUSIVELY EYES ONLY Huang, Kissinger, Rodman, Sept 8, & Sept 19, 1972 NYC For the President's Files

ジャー会談録には随所に「笑」の文字が挿入されている。

## A ソ連

中国側の最大の関心事は言うまでもなく「北方の隣人」(ソ連)だった。ソ連への敵対心はキッシンジャーが煽りたてるまでもなく、中国指導部には強く、米中両国の共通認識となっていた。とりわけ72年のソ印平和友好協力条約締結(8月)と印パ戦争(12月)のあと、中国の対ソ警戒心は一層強まった。

米国は対中和解と同時進行で、対ソデタントも推進していた。ソ連にとってのデタント政策は米中接近に触発された側面があるが、対欧、対米の両面で極めて積極的にイニシアティブをとった。このことは、また中国の疑心暗鬼をさらに煽る、という連動作用を生み出すことになる。

キッシンジャーの出発前に用意された部厚いブリーフィングブックのなかの「ソ連」の部分では、米国のソ連との外交交渉については、中国側に対して仔細に伝える努力をする、との基本方針が確認される。例えば、CSCEについては、ソ連が欧州での現状維持を図ろうとする試みであり、鈍い足取りで進んでいるMBFR交渉とともに、ソ連の西側の背後を安定させ、ソ連はその余力を東部前線(アジア、とくに中国)に振り向けることが出来ると、ソ連のデタント政策への不信感が示されている。

NPT(核不拡散条約)に、中国はとくに神経質になっていたが、キッシンジャーの訪中後、より明瞭になったのは、ソ連が米国に持ちかけたPNWに対して、中国は最も神経を尖らせていることであった。

米国としては、在欧米軍のプレゼンスを従来通り維持し、同時に西欧諸国の結束を促すことが中国側を安心させるとしている。

ソ連の天然ガス計画も中国にとっては不快な、さらには不安な材料だった。数10億ドルの費用と25年の歳月のかかる2大プロジェクトを米政府は検討中であること、また米企業は日本の参加に関心を示していると、ブリーフィングしている。

冒頭に、中ソ間の緊張についての記述がある。

(1)どの程度、毛個人のロシア人への不信感によるものか、

(2)文革と林彪事件 [9/8/71] のあとの国内政治（とくに軍部）をコントロールするために、毛や周がどれほど外部の脅威を利用しようとしているのか、今後見極めていかなければならないとしている。[この(2)は穿ちすぎた分析であり、中国は心底ソ連の脅威を感じていたのは間違いない。]

ブリーフィングブックは、ソ連が中国に対して1971年1月に武力不行使協定を提案し、中国側がこれを拒否したことを述べ、林彪がソ連と闇取引をしていたとの中国当局の主張に一定の信憑性を与えるものであると解釈している。（このソ連の提案については一度だけキッシンジャーの訪中会談のなかで話題になった。キッシンジャーは同盟国同士で武力不行使協定とは、と笑いの材料にした。）

果せるかな、北京での会談<sup>19)</sup>では、毛や周による激しいデタント批判、ソ連批判がウンザリするほど繰り返された。またそれは西欧批判にも繋がっていく。

キッシンジャー——米ソデタントは、1971年の本官の北京秘密訪問により促進されたことは疑いをいれませんが、米中関係の進展が、ソ連に対して対米関係を改善しようとするインセンティブを与えました。

キッシンジャー——ソ連はいつも米国との軍事的対決を避けてきました [その例として、1970年秋にソ連がキューバのシエンフエゴス湾に潜水艦基地を建設しようとして失敗した事件、同じ時期のシリア＝ヨルダン紛争の際、米国が空母2隻を東地中海へ派遣したこと、第2次ベルリン危機、などを挙げている]。これと関連して、米国が日本とフィリピンのスービク湾に海軍基地を有し、加えてディエゴガルシア島（英領）とバーレーンに小さな基地を建設していること、そして地中海に第7艦隊を配備していることなども挙げている。

キッシンジャー——ソ連の究極の目標はわれわれ [米国] を孤立させることです。

キッシンジャー——ソ連は（CSCEを提唱するなどして）欧州にはもはや危険は存在しないとの印象を作り出そうとしています。

---

19) Memorandum of Conversation TOP SECRET/SENSITIVE/EXCLUSIVELY EYES ONLY Chou En-lai, Henry A. Kissinger Feb 15,16,17,1973, Peking, NSC Files, Country Files, Far East Box98; Mao Tse-tung, Chou En-lai, Henry A. Kissinger, Feb 17-18, 1973 同上ファイル



周——ソ連の政策は西欧を油断させ士気を失わせることです。

キッシンジャー——欧州のわれわれの同盟国は近視眼的です。欧州の指導者の英雄的時代は過ぎ去りました。

周——平和幻想が膨らんでいますが、見せかけのもので、とても危険なものです。

周——ソ連のいわゆるデタントは欺瞞です。口ではデタントを言いながら、実際には膨張主義を実践しているのです。冷戦時代が戻って来ました。ソ連は核戦争を戦うことを恐れていますし、通常戦争が核戦争にエスカレートすることすら心配しています。そのために核条約(PNW)のような馬鹿げた考えを持つのです。

このあと、周のソ連批判やキッシンジャーの欧州に対する批判的なコメントが繰り返される。

毛=キッシンジャー会談も内容は大同小異である。

キッシンジャー——欧州の指導者はいまダメな連中ばかりです。

毛——彼ら〔西欧諸国〕は互いに結束していない。

周——米国はまだポンピドゥ〔Georges Pompidou 仏大統領〕を助けるべきだ

毛——〔フランスでは〕社会党と共産党がかれ〔ポンピドゥ〕に対して、力を合わせて攻撃している。

キッシンジャー——はい、かれらは結束しています。

毛——ソ連は〔フランス〕共産党が政権につくことを望んでいる。私はあそのの〔フランスの〕共産党も嫌いだし、おたくの〔米国の〕共産党も嫌いだ。私は貴殿は好きだが、貴国の共産党は嫌いだ〔笑〕。

……

毛——〔西欧は〕ロシアを東方へ押して、われわれ〔中国〕や日本に向けようとしている。そして多分、貴国〔米国〕にも、太平洋やインド洋で。

キッシンジャー——われわれ〔米国〕は、ドイツ〔西独〕では〔ブランド首相の社民党ではなく保守的な〕反対野党を好みます。

毛——われわれもドイツ〔西独〕の〔保守的な〕野党の方を鼻屑にしています。

ここでついながら、革命家として有名なゲヴァラ(Che Guevara)やチリ大

統領に当選した社会党のアジェンデ (Salvator Allende Gossens) について一言。周は「ソ連の膨張主義」のメガネを通して見るせいか、かれらについては、好意的なコメントをしていない。毛は「私は右翼が好きだ」とニクソンに言ったことがある。

周はまたレアード (Melvin Laird) 米国防長官が対ソ強硬発言をしていることに対して、「評価する」(appreciate) とキッシンジャーに伝えている。

キッシンジャー——かれら [西独のブランド政権] は馬鹿なことをやっています。

毛——そうです。彼らは敗北者です。欧州全体が平和のことしか考えていない。

周——指導者たちによって創りだされた平和幻想です。

キッシンジャー——そうです。だが、われわれは欧州の防衛強化のために最善を尽くしています。在欧米軍も維持します。

毛——それは大変結構なことです。

キッシンジャー——われわれは、向こう4年間は大幅な兵力削減を計画していません。

毛は「ソ連の膨張」を阻止するためには、米—日—パキスタン—イラン—トルコ—欧州を結ぶ、ソ連包囲網が必要だ、とキッシンジャーに説いている。

## B 日本

ブリーフィングブックの日本関連部分はキッシンジャーや中国の対日観をよく知る NSC のロード (Winston Lord) が作成した可能性が高い。

日中共同宣言にいたる背景的事実についての叙述がなされた後、日本が米国当局の「予想をはるかにこえるスピード」で中国との国交正常化を実現したこと、および台湾と断交した事実などが指摘されている。

もうひとつは、日本側がキッシンジャーに対して日米ソ共同のシベリアの石油および天然ガス資源の開発を提起している事実が記されている。

しかし、日ソ関係は「北方領土」問題などもあって、冷えたままであること。このことは、中国にとっては好ましいこと。その中国は、「ソ連の脅威」を前にして、従来からの立場を変えたこと、具体的には、日本の防衛力強化を是認。

「四次防」も肯定的に受け止めている。日本の「北方領土」請求権に中国が支持を表明している。そして、日米安保条約について反対から支持に立場を変えたこと、などが指摘されている。

日本に関連した「トーキング・ポイント」。中国は、日本に左翼政権が成立し、「独立、民主、中立」の日本が実現することを望んでいた。しかし、米国側の説得の甲斐あって、日米安保や在日米軍は日本の再軍国主義化への歯止めとなっているとの、米国側の論理を中国側はいまや受けいれている。

### 中国の立場

中日関係の改善が太平洋の平和に寄与するとの立場をとる。しかし、中国の日本に対する悪感情や、[日本が] 長期的には同盟を切り替える [ソ連に?] ことへの危惧がある。また、日本の経済的拡張は同時に軍事的膨張主義の種を孕んでいる。日本人が経済的成功に得意になるあまり、ナショナリスト的傾向を強める危険もある。

中国は、日本の膨張主義の向う矛先として、とくに南朝鮮を心配している。

日本の先の選挙 [12/10/72 の第 33 回総選挙] で、社会党と共産党が躍進したことを、「進歩勢力」の伸長、そして「中立、民主、独立の日本」への第一歩、と中国が考えて、この勢力との連携を図ろうとするかもしれない。

### 貴官 [キッシンジャー] の立場

○良好な米中関係と良好な米日関係とは矛盾しない。

○米国は日本の行動に対して抑制的な働きをすること。とくに、日本が軍備増強や独自の核保有に走る動機を、日米安保条約が取り除くこと。

○去る 6 月 [1972 年] に中国側に伝えたことは今回も変りはない。日本は成熟した国であり、自国の進むべき方向を自分で決定するのは当然だが、次のことを米国は望まない――

(1) 自国領土を通常兵力で守る能力以上の再軍備。

(2) 日本が核兵器を取得すること。核戦力での防衛は米国の責任であり続ける。

(3) 地域の軍事的役割を担うこと。

○日本が長期的観点からどこへ進むのか、中国が不安に思っていることは理解できる。今日においてさえ、米日関係は良好であるにも関わらず、ある程度の緊張(strains)がある。これまでの付き合いから、日本は敵に廻せば手強く、友人としても厄介でむずかしいことを知った。中国自身も多分このことを理解するだろう。

○日本外交の行方は、日ソ関係も含めて、米中両国で連絡を保ちながら見守っていく。

キッシンジャーの対日観(より本質的には、対日不信、日本嫌い)をよく知るロードが、このようにキッシンジャーの考え方を十分に反映したトーキング・ポイントを作成したのではないか。また、田中角榮総理のリーダーシップのもとに、日本が一気に日中国交正常化まで走ってしまったことについて、口では歓迎するとは発言しているものの、キッシンジャーは個人的には激しい憤りを感じていたこと、それに加えて、キッシンジャーは“日中協商”が形成されることをひどく恐れていた事実があり、日中間に楔を打ち込みたい、との感情が作用していたとも考えられる。

次に北京での会談のなかの「日本」の箇所を拾ってみる。

キッシンジャー——[キッシンジャーは中国から帰国の途次、日本に立ち寄ることになっていた。] 日本で私は非常にむずかしい問題を抱えているのです。大統領に[今回の訪中について]報告するより前に、日本のマスコミに対して私の訪問のことをどういう風に話せば良いのかということです。私は[肝腎なこと]は何ひとつ言わずに、1時間半喋り続けることになるでしょう[笑]。

周——日本は岐路(crossroads)に差し掛かっています。[中国は]ダレス[John Foster Dulles 米元国務長官]の米日安保条約からの[日本の]逸税(transition)を望んでいません。決して望んではいないのです。われわれはそれを好まないのです。

周——日本の印象を良くするために賠償を求めなかった。

キッシンジャー——われわれは援助を与えました。

周——日本はアジアの戦争[朝鮮戦争、インドシナ戦争]で金儲けをした。あなた方がかれを太らせたのです[笑]。そのことを見通していましたか? 今の

ところは、試み [ないしは]

野心だけですが、かれら [日本人] は現在の状況のなかで、もっと独り立ちすることを望んでいます。ちょうど若者が大人に成長するときのように――。

……

「エコノミック・アニマルズ」の語も出て来る。

……

キッシンジャー——かれら日本人が実践 (practice) のなかに原則 (principle) を据えたのをこれまでに見たことがありますか？

周——いいえ

キッシンジャー——かれらは私の同僚たちと同じです。理屈は言うが実践しない [ここは意味不明]。

周——貴殿の学生 [中曽根康弘を指している] もですか。

キッシンジャー——はい、とくに私の学生たちはそうです<sup>20)</sup>。

キッシンジャー——日本はロシアの経済的潜在性に惹かれています。

毛——かれらは何かを手に入れたいのです。

キッシンジャー——日本とソ連が緊密な政治関係を作ると、非常に危険なことになります。

---

20) キッシンジャーがまだハーヴァードの博士課程の学生時代のこと。指導教授と財団の助力で、1951年から「国際夏期セミナー」を始めた。世界中から次世代を担うリーダーの卵たちをハーヴァード大学に招き、高名な学者の講義を聴かせたり、パーティや娯楽行事を催した。キッシンジャーはこのセミナーを全て取り仕切った。例えば、中曽根が日本から (1954年)、ジスカル=デスタンがフランスから (1958年)、マハティールがマレーシアから (1968年) 招かれている。このセミナーはその後17年間続いた。キッシンジャーは、その後、中曽根たちを「教え子」(my student)と呼んで憚らなかった。その尊大さ、厚顔無恥には驚かされる。因みに、キッシンジャーは5/27/23生、中曽根は5/27/18生、ジスカル=デスタンは2/26/26生である。これとは別に、駐米公使のときに繊維問題などでキッシンジャーと交渉したこともあり、そのあとアメリカ局長を務めた吉野文六もキッシンジャーの“my student”だった。キッシンジャーはことあるごとに、だれかれとなく、“my student”だというのが口癖だった。International Summer Seminar については、Isaacson (1992) 70-80。ついでながら、ホワイトハウスでキッシンジャーの補佐官を務めたロドマン (Peter W. Rodman) は正真正銘かれの学生だった。この2月訪中ではキッシンジャーに随行。29歳だった。このときの周との会談では、ロドマンの面前で、「かれの論文を15回書き直させた」とキッシンジャーは得意顔でしかし冗談めかして言っている。

毛——その可能性はすくないでしょう。

周——その見込みはあまりないですね。

## C 帰国報告

キッシンジャーは帰国前にも電文でニクソンへの報告を行った。周や毛に会ったことなどを知らせるものだったが、内容については、その高い機密性のゆえに閣下に直接お会いしてご報告したいとしている。ただ、相互に連絡事務所を開設することに合意したこと、および目下作成中のコミュニケは、同時発表となり、ワシントン時間の2月22日午前11時で合意した。そのときまでこのことについては極秘扱いとすること、などは伝えている。

帰国後の3月2日付でキッシンジャーはニクソンに宛て24頁の“My Trip to China”を提出した<sup>21)</sup>。

以下、要点を列挙する。

- (1)対ソ関係の更なる改善と「平和の構造」の構築を唱える一方で、中国とは「ズバリ言って、暗黙の同盟 (tacit allies) の関係に入った」[この鍵括弧の部分には強調の下線が引かれている]。
- (2)大統領閣下の訪中の後、パリの公式チャネルとニューヨーク市の秘密の（プライベートの）チャネルと役割分担がなされることで合意された。
- (3)（今回の訪中で改めて印象付けられたのは）中国の指導者（毛と周）が、グローバルで長期的視点を持っている世界でも稀有な人たちだ、と言うことです。いまや、多くの重要な点で（ソ連、欧州、東南アジア、そして日本についてすら）、米国の視点と似通ったものに近づいています。
- (4)中国は地球の到るところでソ連の影を見、米国がそれらすべての地点でソ連に対抗することを求め、欧州や日本とも連携するよう望んでいます。
- (5)それでもなお、毛と周は（米国を完全には信用しておらず）ソ連を蔭で助けているのではないかと疑っています。とくに毛は、ソ連が中国を攻撃し、長期戦

---

21) Memorandum for the President from Kissinger “My Trip to China” March 2, 1973  
TOP SECRET/SENSITIVE/EXCLUSIVELY EYES ONLY, Country Files, Far East Box  
98

になり、双方が消耗することを、米国が望んでいるのではないか、との一抹の疑念を抱いています。

(6) 欧州はソ連の作り出した平和の幻想により、士気を喪失し、力を抜いている。

とくに「西独首相ブランドによって進められている」東方外交に象徴されるいかさまのデタント (a fake detente) は危険なものと、中国の眼には映っている。

CSCE や MBFR の交渉は、ソ連の西側の後方を安全にしたうえで、(東側の) 中国へ全力を注がせることになると考えている。

その文脈で欧州の左翼勢力には軽蔑を示す。フランスのミテラン (Francois Mitterand) のポンピドゥ大統領への挑戦を不安を持って眺めている。また西独のひ弱さにも心配している。

欧州は経済的には遅く成長したが、軍事的にはひ弱だと、周は指摘する。

(7) 米国としては、CSCE は西欧諸国によって、米国に押しつけられたものとの立場をとる。唯一の対処方法は、交渉を出来るだけ簡単な短いものに、また無意味なものにするよう努力する。逆に MBFR は有用である。(なぜならば) 「マンフィールド決議のように」議会が欧州からの一方的撤兵をしようとする動きを喰い止める働きがある。同時に、ソ連兵力の脅威について欧州の同盟国を啓蒙する働きもある。

そして、米ソ中の「三角外交」について、冒頭に引用した有名なフレーズが出て来る。「[中ソの] 両方の首都に絶えざる注意を払いながら、われわれは、茅台酒とウォッカの両方を飲み続けることが出来るべきです」。両方をそれぞれ梃子として使いながら微妙で「困難なバランス」外交を行わねばなりません。「かれ [ブレジネフ] を満足させ、同時に周を不快にさせないようにすることは大変困難な作業 (a challenge) です」

毛、周は、米国が欧州と緊密な関係を維持すること、日本については、(日米間の) 通商紛争が政治関係の妨げとなってはならない、と諭す。

毛は、日、米、イラン、パキスタン、トルコなどによる「反ソ枢軸」(anti-Soviet axis) の形成を促そうとする。

本報告書の 16, 17 頁の 1 頁と 1/4 位が「日本」に割かれている。

○中国は過去 20 か月のあいだに、日本に対する態度を 180 度転換させた。いま

や中国は日本を米国とともに、ソ連とインドに対抗するうえでの「始まったばかりの同盟国」(an incipient ally)と看做すようになった。

○田中の訪中と日中国交正常化はこうした考えを助けている。

○周は訪日したいとの意思表示をした。

○周——日本はいま岐路に立っている。米国は日本を太らせたが、緊密な関係を続け、万が一にも、日本がソ連と結びつくことのないように警戒すること、もしそうなれば、世界にとっての一大脅威だ。

周——ソ連はかれら[日本]にとって、とても魅力的ですね。石油、天然ガス、それに木材。日本がソ連に取り込まれないようにしなければならぬ。

(ただし、日本人には対ソ不信感がある)

日本軍国主義の危険(に触れて)、われわれは、かれらを最善のコース(channel)を採るように制禦(harness)しなければなりません。

2月17日から日付が変わる深夜の毛=キッシンジャー会談でも「日本」が話題にあがっている。

毛——貴国と、欧州および日本のことで、互いに協力したいですね。

……

毛——貴殿が日本へ立ち寄られるときには、日本人ともっと話す時間を持つべきだと思いますよ。1日しか会っていませんが、それでは日本人の顔が立ちませんよ[キッシンジャーは1973年2月19日から20日にかけて来日した]。

○毛からキッシンジャーに言われたこと。訪中からの帰国途上で東京に立ち寄るが、たった1日と言うのは間違っている。米国の同盟国にはより長時間滞在すべし。

○キッシンジャーが毛に伝えたこと。トーキョーの歓心を買おうと、米中が互いに競うべきではない。日本のナショナリズムを復活させるだけだ。

————— ○ —————

台湾と米中関係について——

○米中関係の正常化に向けて、台湾からの兵力削減。少なくとも、F4戦闘機[いわゆるファントム]の2中隊(squadrons)を撤退させる。



○正常化への第一歩として、(相互の首都に)「連絡事務所」(liaison offices = LO)を設置することに合意した。[台湾の大使館が置かれている以上、中国としては米国国内に外交機関を置けないとの立場を大きく変えるものであった。] キッシンジャーは周との会談のなかで「それは、非公式で公式の、非外交的で外交的な事務所を持つという、新しい経験です」と冗談めかして述べている。連絡事務所設置についてはコミュニケの最後で言及された。このことにより、パリ・チャンネルは不用になったが、ニューヨーク市の裏チャンネルは残し、秘密を伴うものを話し合うことも合意された。

○米中国交正常化への動きを、1974年の米選挙後に本格化させ、[ニクソンの任期終了前の] 1976年半ばまでには、「日本方式」(=台湾との断交)で正常化させる。

○台湾ほど、米国に友好的で誠実な国はなかったので、痛みを伴う。

73年2月のキッシンジャーの訪中についてのニクソン大統領にあてた報告には、別に、「本官の北京訪問中の雰囲気」(3/2付)<sup>22)</sup>と「毛主席との会見」(2/24付)<sup>23)</sup>も付されている。

前者では、中国側の自分たち一行に対する態度が、これまでに比べて、格段に良くなったことが述べられている。例えば兵士が直立の姿勢をとって敬礼したことや、北京の通りの人払いをせず、自分たちを市中の中国人が見ることの出来るようにしたこと、などを挙げて、中国の対米外交の転換に自信を持ち始め(また一般市民に受け入れられてきたこと)の証左と見ている。

後者では、キッシンジャーが毛から強い印象を受けたことを窺わせる。「回転の速い、俗人受けするユーモア」「かれから威光と深遠な仁智とが、輝きとなって放たれている」「周は——閣下の首脳会談のときと変わらず——[毛に対して] 恭々しい態度を示し、どちらがボスであるかは疑問の余地がありません」などと言った具合に、褒めそやしている。毛が「神様からお迎えが来ている」と言う共

22) Memorandum for the President from Kissinger "Atmospherics of My Trip to Peking" March 2, 1973 TOP SECRET/SENSITIVE/EXCLUSIVELY EYES ONLY, 同上ファイル

23) Memorandum for the President from Kissinger "My Meeting with Chairman Mao" Feb 24, 1973 TOP SECRET/SENSITIVE/EXCLUSIVELY EYES ONLY, 同上ファイル

産主義者らしからぬ言葉を2度も使ったことに注目し、中国指導部の世代交代の間近いことを警告している<sup>24)</sup>。毛はソ連が「帝政ロシアの時代から」歴史的な領土拡大を行ってきたことを指摘したあと、今日の「ソ連の目標は欧州とアジアの、2つの大陸を征服すること」だと述べた。こうしたことから「米国がこのようなソ連の企図に対抗する強力な世界的役割を果たしてくれることを、中国は望んでいる」と語り、先出の、米-日-パキスタン-イラン-トルコ-欧州の枢軸形成を切望した。

毛沢東は、ニクソン訪中時に比して、健康状態が優れており、会談が2時間近くに及んだにもかかわらず、饒舌で冗談も絶やさなかったし、会話が戦略的なことにも及んだ。また日本の面子を立てるよう促したことも印象的である<sup>25)</sup>。

とにかく、毛はかなりご機嫌のようだった。この背景にはいくつかの要素が考えられる。(1)ヴェトナム停戦成立、(2)日中国交樹立（ほかにも西独などとの間にも国交樹立）。(3)ニクソン再選により、米中国交正常化への道が固まったとみられたこと、などであった。

## VIII 連絡事務所 (LO) の設置

今回の訪中で、周との間で、相互の首都に「連絡事務所」(liaison offices = LO)の開設が合意された。米中国交正常化への道程の重要な第一歩であった。(台湾の大使館のあるワシントン D.C. には中国の外交官は送れない、と言い張っていた周にとっては、大きな譲歩だったと思われる。) 外交特権 (diplomatic immunities) を相互に与え、施設に国旗掲揚を認める——という事実上の外交出先機関となるはずだった。(ただし、連絡事務所スタッフの行動範囲は限られ、それ以遠の場合、当局へ事前通告を必要とすることになる。また、外交出先機関リストには載せず、外交レセプションにも基本的に招待されない。)

---

24) 1893年12月生れの毛は80歳、1898年3月生れの周は75歳。しかも、前年の1972年5月に周が癌を患っていることが判明した。Burr (1999) 166; 井上 (2010) 502-03。もっともキッシンジャーはこのことをこの時点では知らなかった

25) Kissinger (1992) 46-57も参照

念のために確認しておきたいことは、中国の国連加盟（10/25/71）にともない、中国はニューヨーク市に国連代表部を設けており、「パリ・チャンネル」（パリにある米中の大使館相互間の内密の接触）とは別に、こちらは、ホワイトハウスのスタッフとの内密の接触が続けられていた。その一方で、キッシンジャーと中国国連大使の黄華とはニューヨーク市内の別の場所での密会を行っていた（73年1月の時点ではまだ行われていたことが史料で確認できる）。

さて、連絡事務所設置後は、これが通常の公式外交ルートとなり、「パリ・チャンネル」は消滅する。しかし、極秘事項についての話し合いや、コミュニケーションは依然、ニューヨーク市内でも行われた。「裏チャンネル」と言えよう。

北京で米国の連絡事務所（USLO）が動き始めるまでは、それまでのチャンネルが動いた。NSCのロードとフッド（William Hood）なる人物との間で連絡が続く。電文では、場所をわざと不明にしているが、パリではなかろうか。重要な外交案件について、フッドが中国側との連絡役を務めている。パリの米国大使館付武官であるグエイ大佐はウオルターズ陸軍少将の後任にあたるが、かれも仲介役をしている。一方、ニューヨークでは、USLO開設後に置いても、例えば、ホワイトハウスのファジオ（Jim Fazio）らが、以前と同様に、中国の国連代表部との間の連絡役を務めている。パリやニューヨークの連絡に際しては、「われわれのニューヨークのガールフレンド」「ウイン [Winston Lord] の友達」「ピーター [Peter W. Rodman] のガールフレンド」「われわれのニューヨークの顧客」「どうぞ次のメッセージをあなたの顧客に渡して下さい」「われわれの顧客」「あなたの顧客」など、隠語が多用されている。

5月開設を目途に、との合意もなされたが、キッシンジャーは中国滞在中にホワイトハウスのかれの次席（ヘイグの後任）となったスコウクロフト（Brent Scowcroft）空軍少将経由で大統領あてに「貿易事務所のような非公式機関」の相互設置について、決裁を仰ぎ、キービステインにいたニクソンはこれに「OK—Yes」の手書きの許可を与えた<sup>26)</sup>。NSCスタッフには、日本がLT貿易のために設置した「貿易事務所」のモデルがその念頭にあった。

26) Memorandum for the President from Kissinger Feb 16, 1972 TOP SECRET/SENSITIVE/EXCLUSIVELY EYES ONLY HAK Trip Files Box 29

キッシンジャー帰国後の2月22日に予定通り、「共同声明」が出されたが、このなかで、連絡事務所の相互開設が発表された。

間もなく、米中双方の主要メンバーが決定した。

まず、中国側は、所長に黄鎮 (Huang Chen)。駐仏大使からの転出。「パリ・チャンネル」として、キッシンジャーとは旧知の間柄だった。1908年生。軍人出身の外交官で駐インドネシアや駐ハンガリー大使を経て、駐仏大使となり、すでに外交部副部長も勤めた大物。副所長には韓叙 (Han Hsu)。外交部儀典局長として、ニクソン、キッシンジャーをはじめ、米国の訪中団の接受をした人物、1924年生。

これに対し米国側の所長 (Chief) はブルース (David K. E. Bruce)。1898年生。毛並みが良く、容姿にも恵まれ、駐仏、駐西独、駐英の各大使を歴任した稀有な経歴の持ち主。ニクソン政権では、パリでの公式のヴェトナム和平交渉の首席全権 (1970-71) を務めた<sup>27)</sup>。初期の対中交渉者に擬せられたこともあったが、ヴェトナム交渉に関与したことで除外された。キッシンジャーさえもが一目も二目も置く存在である。今回、隠居から引っ張り出される格好となった。

副所長には、ジェンキンス (Alfred LeS Jenkins) とホルドリジ (John H. Holdridge) の2名。前者は国務省に、後者はNSCに所属するが、ともにキッシンジャーの訪中に随行した経験を持ち、中国側にも顔を知られている。副所長に2名も指名されたのは、キッシンジャーが訪中の際に中国側に対し、両名の名を挙げていて、引っ込みがつかなくかたためである。

5月の開設に先立ち、LO 設置準備のために、中国からは韓副所長、米国からはジェンキンス副所長が先遣隊となって現地入りする。

4月半ば、キッシンジャーはニューヨークの中国国連代表部を訪れ、黄華大使と会い、主要なテーマを話し合ったが、この席にブルースを同席させ、黄に紹介している。ブルース夫妻は5月半ば到北京に到着した。ホルドリジ副所長が、スコウクロフトに宛てた電文で、給与など待遇の問題が絡んでくるので、ブルースを「大使」に格付けしてほしい、と要請している。

---

27) ブルース大使の伝記に Lankford (1996) がある

中国側 (PRCLO) の当面の落ち着き先であるワシントンのメイフラワーホテルは台湾系の抗議デモ隊の洗礼を受け、五星紅旗が焼かれるなどした。5月30日にはワシントンに到着していた黄鎮所長にニクソン大統領がホワイトハウスの執務室で朝の15分間を割いて会見した。

北京のUSLOには軍人が混じっていた。警備のための海兵隊員たちと、USLOを設置するための工事に係わる海軍建設隊員だった。かれらは現役の軍人だが、構外では私服を着用し、武器も携帯しないことになった。中国は戦前に外国の軍人が居留していた苦い経験から、この問題について、予想外に神経質だった。他国の外交出先機関は軍人を使っていなかったもので、それとの整合性の問題もあった。米国側にすれば、海兵隊の士気にかかわる問題であった。しかし海兵隊員の軍服着用や腕章は、中国側からしばしば問題にされた。海兵隊員たちが、毎週末に行う他国の外交官を招いた派手なパーティやオフィスの紋章までもが中国当局の不興を買った。また、海兵隊創設記念日のバースデーケーキのような些細なことまでもが現地人との諍いとなった。

結局、海兵隊は国外退去。代りに北京の市警察がUSLO施設の門外で護衛にあたることになった<sup>28)</sup>。73年の年末に、所員のひとり (Nicholas Platt) が交通事故で15歳の女子生徒を死に至らしめたことも中国側の怒りを招き、中国との関係悪化に憂慮して、プラットは「自主的に」帰国した。2万円の「見舞金」(慰謝料ではない)も支払われた<sup>29)</sup>。

## IX 核戦争防止 (PNW) 協定

米ソ間にはデタントが進行していた。ニクソンが1972年5月に訪ソ、そして翌73年6月にはブレジネフの訪米が見られた。第1次首脳会談では、SALT I と ABM 制限条約に加えて、相互不戦を謳った「基本原則」も調印された。第2次首脳会談では SALT II についての基本原則の合意と、核兵器の相互不使用を規定する「核戦争防止 (PNW) 協定」調印が実現した。

28) 海兵隊退去に関連する文書は夥しい数にのぼる。また Lilley (2004) 183 も参照

29) Holdridge (1997) 153 も参照

中国はこうした動きに警戒心、不満、憤りなどの入り混じった気持ちを抱いた。中国はデタントそのものに不信感をもっていたが、とりわけ、PNWには、米国側の予想以上の反撥をみせた<sup>30)</sup>。

この協定の最初の提案は、第1次米ソサミットの準備のために72年4月に極秘訪ソしたキッシンジャーに対してブレジネフより直接にそして秘かになされた。続いて、翌月のモスクワでもブレジネフはニクソンに対して同じ提案をした。その後、米国側の引き延ばし戦術も限界に達し、キッシンジャーの73年5月訪ソでは、“核兵器不使用”から“武器不行使”に内容を入れ替えて、逆提案した。ソ連提案の裏には“米国が中国と軍事同盟を結ぶのではないか”とのあまり根拠のない恐怖心があることを知っていたニクソンは、翌月のブレジネフの訪米のときにこれを強く打ち消した。

米ソともに極秘裡にPNW交渉を進めており、米国では、関係省庁にも内密にされていた。しかしその一方で、西独、英、仏の3つのNATO同盟国と中国だけには最高レベルに限り通報していた。

協定は第2次米ソ首脳会談中の73年6月22日にホワイトハウスのイーストルームで調印された。その数時間前に、ロジャース国務長官はワシントン駐在のNATO各国大使に、ブリュッセルではラムズフェルド (Donald H. Rumsfeld) 北大西洋評議会 (NAC) 米代表 (大使) が関係各国代表に、そして、国務省高官が、日本、オーストラリア、ニュージーランド、イスラエル、エジプトの各駐米大使に連絡した<sup>31)</sup>。米国の“核の傘”に守られていると思っていた国ぐににとっては青天の霹靂であったろう。

ニクソン大統領はPNWについては、キッシンジャーに一任し、関係省庁には秘密にしていた。米ソ間のやりとりは、専ら、キッシンジャーとドブリニン・ソ連駐米大使の裏チャンネルを通して行われた。ところが興味深いことに、キッシンジャーは英国のソ連専門家であるブリムロー (Sir Thomas Brimelow) からの全

---

30) PNWの背景、内容、意味合いなどは、Garthoff (1994) 376以下に、またこの協定をめぐる米ソ交渉については、Kissinger (1979) 1152およびKissinger (1982) 274-293などに詳しい

31) Garthoff (1994) 381

面的な協力を得てソ連への対案を作成した。[ブリムローはこのあとすぐに駐ソ大使となった]。キッシンジャーはブリムローの果たした役割をもって、「英米の“特殊な関係”の最高の事例」だと表現した<sup>32)</sup>。

キッシンジャーは72年5月のニクソン訪ソに同行し、また9月にも訪ソする。ブレジネフはPNW交渉を急がせようとした。キッシンジャーは出発直前に裏チャンネルのドブリニン大使に伝えたことをくり返すしかなかった。(1) (世界の)「2国共同管理」(condominium)はNo、(2)米ソがそれぞれ自国のみを守ろうとすると見られることは、No、(3)核戦争を禁止する一方で通常戦争は容認できるとの印象を与えることは、No、の3点だった<sup>33)</sup>。

73年2月の周=キッシンジャー会談でも、16日と17日にPNWがとりあげられた。周は、同盟国同士であるはずの中ソ間で武力不行使条約(このなかには、核兵器不使用も含まれていた)を結ぼうとのソ連からの奇妙な提案があった、と述べた。

キッシンジャーはこれまでに相談したのは英国だけだと説明したあと、英国側の分析も総理閣下や本官のものと同じであると述べ、問題点を挙げた。かりにソ連が欧州を攻撃した場合に、ソ連領内は安全に保たれること、かりに中東で戦争が起った場合、核兵器が使えないこと、核戦争のリスクなしに世界の軍事バランスを変える危険を孕んでいること、の3点だった<sup>34)</sup>。

キッシンジャーは、帰国後、ニューヨークの黄華国連大使やワシントンの黄鎮大使(PRCLO所長)と会い、PNWについての意見交換をくり返した。例えば、4月24日夜にホワイトハウスからの使者(McNamis)がニューヨークの中国国連代表部へソ連側の草案を手渡した。これに対する中国側の文書が27日に手渡された。またフッドが5月2日に中国側のメッセージを受け取っている<sup>35)</sup>。

32) Kissinger (1982) 274-293; Garthoff (1994) 377, 379

33) Kissinger (1982) 278

34) Memorandum of Conversation Chou En-lai, Kissinger Peking, Feb, 17, 1973 TOP SECRET/SENSITIVE/EXCLUSIVELY EYES ONLY NSC Files, Country Files, Far East Box 98

35) To Lord from Hood 5/2/73 NY TOP SECRET/SENSITIVE/EXCLUSIVELY EYES ONLY Country Files, Far East Box 94



中国側メッセージには次のような文言が並んでいる。

本協定は「世界に核覇権をうち立てようと意図する」もの。

本協定は、核兵器の使用〔米ソの国土以外で?〕を否定するものでも核兵器そのものの廃棄を明言するものでもない。

“米ソ間協調”の仮面の下で覇権主義を実践し、核戦争防止の仮面の下で世界の他の国ぐにに対して核の恫喝を行うもの。

本協定は派手な装いでソ連が世界を欺こうとし、偽りの安心感を広げようとし、しかも、それに対して米国側が理解を示したかのような印象を与えるもの。

5月のニューヨークでの密会では、黄華がキッシンジャーに中国側のPNWへの反対意見を手渡した<sup>36)</sup>。

黄——いったん、この協定が調印されれば、偽りの安全の気運が作りだされ、この機運は世界中に広がり、人々との警戒心を緩めてしまう。

キッシンジャー——なかなか重要な点を衝いています

黄——……一種の子守唄だ。貴国〔米国〕は、事実上、人びとに枕を出して眠りにつきなさいと言っている。

黄——……世界中の人びとの警戒心を解き……。ソ連は中国を孤立化させるプロパガンダを実行するチャンスを手に入れる。

キッシンジャー——よく分る。早速、大統領と話し合う……

中国の孤立化を防ぐことがわれわれの目的だ。ポンピドゥ〔仏〕大統領と長時間話し合ったとき〔5/18/73〕、中国の生存と強さこそが欧州の安全保障にとって不可欠だ、と説明した<sup>37)</sup>。

その同じ日には、ワシントンで黄鎮からも、中国の立場を説明するステートメントを手渡された。黄は「(米ソ)2国の核覇権による世界支配」と表現した<sup>38)</sup>。

このような中国側の言い分を裏付けるようなブレジネフの発言(キッシンジャーの間接引用ながら)がある。キッシンジャーがモスクワ訪問から戻った直後の

36) Memorandum of Conversation Huang, Kissinger May 27, 1973 PRC Mission to the UN, NYC TOP SECRET/SENSITIVE/EXCLUSIVELY EYES ONLY 同上ファイル Box 94

37) Dr. Kissinger's Remarks to President Pompidou, May 18, 1973 同上ファイル Box 94

38) no heading Received May 27, 1973 同上ファイル Box 94



韓叙 (PRCLO 副所長) との5月14日のホワイトハウスにおける会談の記録である<sup>39)</sup>。

キッシンジャー …… かれ [ブレジネフ] が言うに、ソ連と米国は中国が核大国になることを阻止する共同の義務を有する。そしてかれは [私に] 聞いた。「貴国は中国を同盟国と考えているのか。」私は「いいえ。わが国は [中国を] 同盟国とは考えていません——友邦と考えてはおりますが」と答えると、かれは、「そうか、貴国が友邦を持つのは勝手だが、貴国とわが国とはパートナー関係であるべきだ」と主張した。——これは、モスクワとワシントンの意味だが、かれ [ブレジネフ] は、われわれは中国が核大国になることを阻止する共同の責任がある」とまたくり返した。……大国のショーヴィズムです……

……

ブレジネフとの会談の直後に、ドブリニン駐米大使がまたこの点を確認しようとした。書記長は冗談で言ったのではない。本気で米中間に正式の協定が結ばれていないか知りたがっている。そんなものはないと答えたことをキッシンジャーは韓叙に告げている。

6月半ばに、ブレジネフはワシントンに到着した。この米ソ首脳会談の合間にグロムイコ外相はブレジネフが意味したことを念を押したいとして、米中間に軍事協定が成立すれば、それは [ソ連との] 戦争となる、とキッシンジャーに警告した。

中国と同様にフランスも PNW に強い不安と不信を示した。エリゼ宮でキッシンジャーは5月18日にポンピドゥ大統領に会った。ポンピドゥはニクソンが東西データで大きくソ連に歩み寄った。2つの超大国が核戦争を否定することは、通常戦争の脅威を欧州や中国に与えることになる、と述べた<sup>40)</sup>。

このポンピドゥの不安に対し、キッシンジャーは次のように応じた。米国が中国でなくソ連の方を選んだとでも仰しゃるのですか。……弱い方に対抗して強い

39) Memorandum of Conversation Kissinger, Han Hsu May 15, 1973 The White House pp. 5-6 同上ファイル Box 94; Kissinger (1982) 295 も参照

40) Kissinger (1982) 166-67. フランスの PNW に対する不安や不満については、Barnet (1983) 315, 322; 合六 (2011) 76 も参照。要するに、欧州は米核戦力に依存していたからである。また中国と同様に、米ソによる世界の「共同管理」への不満も渦巻いていた

方と組むのはナンセンスです。もしソ連が中国を無力にすれば、欧州全体がフィンランド化し、米国は完全に孤立してしまいます。ですから、ソ連が中国を破滅させることを望まないこと、許さないことが、われわれ [米国] の国益に適っているのです。

キッシンジャーはこのポンピドゥ大統領との会談の要旨を5月29日に、赴任して間もない黄鎮 (PRCLO) 所長に手渡した<sup>41)</sup>。

1973年半ばごろから米中関係がギクシャクしてくる。6月のワシントンでの米ソ首脳会談についてブリーフするため、キッシンジャーは訪中の意向を持っていたが、中国側は日程を7月、8月、そして10月へとずらした。10月には中東戦争が勃発したために、実際には、キッシンジャーの訪中は11月になってやっと実現した (この間、キッシンジャーは9月22日に國務長官に就任し、大統領補佐官を兼務することとなった)。

米中の“蜜月”は確実に終っていた。北京から、ジェンキンスとホルドリジの両副所長名でキッシンジャーに宛てられた電文 (7月20日付) には、中国側はソ連からの攻撃がない、あるいは差し迫ってはいない、と考えるようになったと伝えている。もともと米中両国を結びつけた [ソ連からの脅威という] 負の要因をもはや頼りにすることは出来ず、よりむずかしい正の要因 [例えば、国交正常化] にこれからは頼っていかねばならない、と注意を促している<sup>42)</sup>。

73年夏のブルース所長からキッシンジャーへ送られた電文や NSC スタッフで中国専門家のソロモン (Richard H. Solomon) の用意したメモランダムでは、両国関係が「幾分冷えてきている」とか、「訪中を歓迎する以前のムード」には最近、翳りが出ているとか、毛や周が国内からの反動的な圧力を受けているのではないとか、の分析が連なっている<sup>43)</sup>。

---

41) Dr. Kissinger's Remarks to President Pompidou, May 18, 1973 同上

42) To Kissinger from Jenkins/Holdridge July 20, 1973 TOP SECRET/SENSITIVE/EXCLUSIVELY EYES ONLY 同上ファイル Box 95

43) Memorandum for Kissinger from Solomon "Mao and Chou Under Pressure? Some Recent Pieces in the Chinese Puzzle" July 24 1973 TOP SECRET/SENSITIVE/EXCLUSIVELY EYES ONLY; To Kissinger from Bruce August 19, 1973 Peking 031 TOP SECRET/SENSITIVE/EYES ONLY ともに同上

この間、北京のUSLOはキッシンジャー国務長官訪中の受け入れ準備も進めていた。

73年末にワシントンの黄鎮所長が帰国して、翌年3月になってもワシントンを不在にしていることについて、キッシンジャーは訝り、韓副所長にそれとなく問うている。この事実も、この時期の両国関係が微妙になっていたことを示唆していたのではなかろうか。実は、ブルースもかなりの期間、北京を留守にした。

年が明けて、1974年。ソロモンはキッシンジャーに対して、「われわれと北京との2国間関係は停止状態」と表現した。米国の州知事グループの訪中も棚上げ状態、文化・科学交流も休止状態。北京のUSLOから中国当局へ、インガソル大使〔Robert Ingersoll 駐日大使は73年10月に東アジア・太平洋担当国務次官補に就任した〕を含む米国官僚8名のヴィザの申請をしたが、これが却下されたこと、また米中それぞれの凍結資産解除の問題も遅延していることなど、「一体、北京で何が起っているのだらう」と問い掛けしている。いま中国指導層の間では外交論争が進行中で、軍部が〔米国との〕和解を疑問視していることを指摘した<sup>44)</sup>。同じ頃、韓副所長が国務省にやって来て、ロードとハメル (Arthur W. Hummel, Jr.) に抗議文を手渡した。「中国の領土である」パラセル諸島 (西沙諸島) に米国人が侵入したので逮捕したというものだった。(ついでながら、ロード (Winston Lord) はNSCでキッシンジャーに仕えていた。その後73年7月頃、一時、休暇とも辞職ともとれる行動をとったあと、NSCに戻った。そしてキッシンジャーの国務長官就任とともに同省の要職についた。)

74年2月2日の『人民日報』が「批林批孔」運動を提唱し、いよいよ本格化する。左翼の江青 (毛夫人) までもが、極左から批判を受けた。江青がユージン・オーマンディ率いるフィラデルフィア交響楽団を招き、ベートーヴェンの第6番やシューベルトの演奏が行われたこと。またミケランジェロ・アントニオーニの中国を描いた映画を上映したことが批判の対象となった。キッシンジャー宛てのソロモンのメモランダムでは、これは「米国人への警告」「北京が米国へあ

44) Memorandum for Secretary Kissinger from Solomon "Confucius and the State Governors' China Trip: Is Peking Debating Foreign Policy?" Jan. 25, 1974 SECRET/SEN-SITVE 同ファイル Box 96

るシグナルを送っている」と分析している<sup>45)</sup>。

実は中国国内には排外主義的な気運が漲るようになり、ジェンキンスからキッシンジャー国務長官への報告(2/25/74付)には「当地の雰囲気は、北京の空気のように冷え込んでいる」とある。これは米国だけでなく他国も同様であり、例えば、アルジェリアのミュージカルの内容を事前に報告させようとしてキャンセルとなったり、フランスの語学教師2名が中国人労働者の写真を撮ろうとしたところ、軍隊に取り囲まれ、カメラとフィルムを没収された。

5月にはキッシンジャー国務長官あてにブルース所長の名前で「今日の米中関係」の表題の電文が送られてきた<sup>46)</sup>。

ブルースは周の地位が弱まっていることを指摘。毛「は聖域視されて、攻撃する者はいないが」が先に死んで、周が生き残った場合は米中関係は危くなる。逆の場合は大丈夫だろうと分析している。周は儀礼的な役割から解任された。かれの年齢やその過酷な仕事の内容「1日に平均18時間仕事をしている」から言っても自然の成り行きかもしれないとも、記されている。

中国指導部では次の4点で失望が起っていることが、この「冷却化」の理由ではないかとする。

(1)米ソデタント、(2)正式の外交関係樹立に向けて米国がなかなか動かないこと、(3)(これと関係して)米国の国内問題となったウオーターゲイト事件がニクソンの足を引っ張っている、(4)カンボジア問題についての米国への不満

4月にはブルースが辞めたがっているとの記事が中国で出始めており、キッシンジャーはこれを否定した<sup>47)</sup>。

---

45) Memorandum for Secretary Kissinger from Solomon "Peking Attacks Beethoven, Schubert, and Antonioni: Further Pressure on China's 'Left' and a Warning to Americans" Feb. 4, 1974 CONFIDENTIAL; 同上 "Peking Sends the U.S. Some Warning Signals" Feb. 16, 1974 SECRET/SENSITIVE いずれも同上

46) To Secstate from USLO Peking (Bruce) May 24, 1974 SECRET 同上ファイル Box 96

47) Memorandum of Conversation Huang Chen, Kissinger April 2, 1974 Department of State "Huang Chen's" Welcome Back" Call on the Secretary" SECRET/SENSITIVE 同上ファイル Box 96. Lankford (1996) 384-85. ブルースは74年9月に退任、帰国。第2代所長には、国連大使を務めたブッシュ (George H.W. Bush) が任命された

## X 朝鮮半島問題

キッシンジャーの73年2月訪中のためのブリーフィングブックの“KOREA”の項は、朝鮮半島の動きを、あまり分析・考察を加えることなく、淡々と叙述している。

しかし、ニクソン政権のグアム・ドクトリン、対中和解、対ソデタントなどの一連の動き、さらには西独による東方外交や、日中国交正常化などが、南北コアに心理的インパクトを与えたことは容易に想像される。とくに、在韓米軍の削減方針は、韓国に孤立感をもたらすとともに、米国への不信をも醸成し、「自立」(“Go it alone”)の姿勢を採り始めた。

具体的には、1971年4月、朴正熙(Park Chung-hee)韓国大統領は「北」との直接交渉を開始すべく、李厚洛(Yi Hu-rak)中央情報部長をその交渉担当者に任命した。差し当たっての目的は人道的なもので、南北双方の赤十字を通して、離散家族の居所を突きとめたり、郵便の往復を話し合うこと、しかし、究極の目的は、南北統一の可能性を探ることであった。

李は数度にわたり平壤を訪問。南北の赤十字も相互訪問を実現した[8月30日には南北朝鮮赤十字の第1回本会議を平壤で開催するにいたる]。

この間、全くの偶然か否か、米独立記念日にあたる7月4日に、南北両政府が平和統一に関する共同声明を発表した。この声明に基づき、板門店で定期的に共同調整委員会を開くことが合意された[10月12日に第1回会合]。

11月初旬、李の平壤訪問の際、金日成(Kim Il-sung)が、外交のような共通問題を討議するための南北連合、ないしは「統一評議会」、さらに、南北首脳会談を提案した。李はこれに前向きな反応を示したが、結局、朴大統領が拒否。人道問題が政治的進展に先行するとの立場をとった。

この間、72年10月17日。朴大統領は、わずか24時間前の突然の予告だけで、非常事態宣言(戒厳令)を発表、「維新体制」を樹立した。「北」に対処するうえでの国内一本化の必要性がこのような[非民主的]措置をとらせた側面がある。

朴の上記のような新外交はニクソン外交と無関係ではない。朴は72年末のニクソンとの会談で、理解を求めたようである。また、ヘイグの72年11月と73

年1月の2度の訪韓で、ニクソンからの理解の気持ちが伝えられたと思われる。

また、トルーマン元大統領の葬儀 [12/26/72 死去] に参列した韓国の金鐘泌 (Kim Chong-pil) 総理と金溶植 (Kim Yong-sik) 外務長官はニクソンと会談しており、このときにもまた理解を求めたと考えられる。

こうして、朴は北の金日成と対等な国内的立場の強化に成功した。

\* PCR UNCURK/UNC<sup>48)</sup>

米国およびオーストラリアなどその友邦が、国連決議に基づいて、「国連軍」の呼称で、戦争に介入して以来、東側陣営および「中立国」(=「非同盟」グループ)は朝鮮半島への「国連」の関与に反対してきた(朝鮮半島の「非国連化」)。

1972年秋の第27回UNGAで、北朝鮮の意向を酌んだ「非同盟」グループのアルジェリアやユーゴスラヴィアがUNC廃止とUNCURKの機能停止を呼びかける決議案を提出しようとしたが、議題にとりあげられなかった(アルジェリアは、フランスからの独立運動に共鳴してくれた北朝鮮に恩義を感じていた)。

1973年秋のUNGAでまたこの問題が持ち出されることは必至だった。

米務省東アジア局韓国担当のレイナード(D. L. Ranard)なる人物が5/29/73付で作成したペーパーは、歴史的背景やワシントンの政策を知るうえで有用である。「 كورياからの国連の退出」と題されている。UNCURKとUNCは創設主体が異なることもあり、別個に取り扱われるべきものであること、UNCURKはすでに「アナクロニスティック」であると明言し、廃止されても構わないと論じている。他方で、UNCについては、いずれ廃止に追い込まれるであろうが、まだ時期尚早であること、また、UNC廃止は何かの重要な取引材料として利用することなくしては、考慮外である、などと論じている。

もうひとつ、作者不明のペーパー「 كوريا政策再考——2つの كوريا政政策」

---

48) 国連統一指令部(the UN Command=UNC)は朝鮮戦争勃発(6/25/50)後の7/24/50に国連軍最高司令官であったマッカーサー(Douglas MacArthur)将軍の要請を受け、国連安保理(UNSC)によって創設されたものである。国連朝鮮統一復興委員会(the UN Commission for the Unification and Rehabilitation of Korea=UNCURK)は、国連軍が北緯38度線を越えて北朝鮮に入った数日後の10/7/50、国連総会(UNGA)によって創られた

がある。冷戦の緊張緩和と米中国交正常化への道程のなかで、これまでの米国のコリア政策は時代遅れとなったと指摘する。コリアに強い関心を持つ米ソ中日の4国は、南北間の戦争の危機を極小化するために、両者の和解を望んでいる。南北コリアともに自己の正統性を主張して、「2つのコリア」を拒否している。しかし、北朝鮮が国連保健機関（WHO）や万国郵便連合（IPU）などの国連関連機関に加入したことは、「2つのコリア」を創りだしたに等しい。米国としては、「2つのコリア」政策をとるべきであり、これに沿って、南北コリアの国連同時加盟や、南コリアの対中接近や、逆に米国の北コリアへのアプローチも視野に入れるべきである<sup>49)</sup>[因みに、東西両独基本条約調印は1972年12月。東西ドイツの国連への同時（別個の）加盟は、73年9月だった。74年9月には米国が東独と国交樹立。中国の西独との国交樹立は72年10月だった。]

1972年のキッシンジャーの訪中で、周はこの問題を持ち出している。キッシンジャーはUNCURKの「解体」には基本的に同意したが、時期を問題にした。72年11月の大統領選挙を待って、それ以降に延期したいというのが、米国側の本音であった。中国側もニクソンの再選を望んでいたので、キッシンジャーの意向に同意せざるを得なかった。

「北」のWHO加盟はUNGAへのオブザーヴァー資格を与えた。すでにチリ(1969)、パキスタンおよびタイ(1972)はUNCURKから離脱。さらに、オーストラリアのような重要メンバーも脱退しようとしていた。

73年のキッシンジャーの2度の訪中でも、周との間で、この問題が取り上げられた。周は北朝鮮の意向を代弁する立場にあったが、UNCURK廃止については、キッシンジャーの同意を得たものの、UNCについては、逆にキッシンジャーの説得をいれることになる。キッシンジャーの論法——中国は「第2の朝鮮戦争」を望んでおらず、半島の分断などの現状維持を望んでいるはず。キッシンジャーはこの点を見抜いており、UNCの存在が半島の安定化に役立っていることを強調。周を納得させた。ただしUNCが無くなったとしても、在韓米軍は依然

49) Memorandum to Kissinger from Rush May 29, 1973 SECRET/SENSITIVE "Removing the UN Presence from Korea" and "Korean Policy Reconsideration: A Two-Korea Policy" SECRET/SENSITIVE 同上 Box 99



残るわけであり、いずれUNCは消滅するとも考えていた。

事実、73年6月にキッシンジャーがホワイトハウスの自分のオフィスで黄鎮と韓叙に会った際に具体的な発言をしている。73年秋のUNGAでUNCURKは廃止されると思っており[事実、11/21/73の第28回UNGAで解散決定]、UNCについては、その翌年(74年)に廃止されると覚悟していると述べた[これは今日に至るも実現していない]。

興味深いことは、1283頁に及ぶキッシンジャーの回顧録(1982)のなかにUNCURKやUNCが全く見出せないことである。かれには取るに足りない問題だったらしい。

ついでながら、東京都内で発生した「金大中事件」(8/8/73)について、喬冠華外交部副部長の来紐(後述)のさい、キッシンジャーとのわずかな会話(10/3/73)があったことを付記しておく。

## XI キッシンジャー訪中(1973年11月)

キッシンジャーの11月訪中実現までには、先述の如く、米中間には隙間風が吹き始めていた。73年6月のブレジネフ書記長訪米による第2次米ソ首脳会談について、キッシンジャーは直ちに北京へ飛んで、その内容を中国側に報告するつもりでいた。ところが、6月から8月に、そして10月へと、中国側の招請は引き延ばされた。10月の訪中は第4次中東戦争勃発で吹き飛ばされ、やっと11月に実現した。

6月16日から25日にかけての米ソ首脳会談は前年5月のニクソン訪ソに続いて両国のデタントを演出するものだった。くり返すまでもなく、中国はデタントに対して強い不信感、嫌悪感を抱いていた。6月のブレジネフ訪米では、ワシントンだけでなく、キャンプデイブッド、そしてサンクレメンテ(西部ホワイトハウス)にも招かれ、少なくとも傍目には極めて友好的な雰囲気が作り出された。このことは中国を強く刺激したはずである。(因みに、周恩来は来日の意向を覗かせていた一方で、台湾の大使館の置かれている限り、ワシントンには行かないと広言していた。)首脳会談では、中国の最も嫌がっていたPNW協定が調印さ



れ、また SALT II 基本合意も成立した。

\* キッシンジャー = 喬会谈<sup>50)</sup>。

喬冠華はニクソン大統領訪中のさい、最終コミュニケ案の一言一句をめぐり、キッシンジャーと丁々発止と渡り合った間柄であり、キッシンジャーにとっては、忘れ難い人物だった筈である。しかも、喬はかつて朝鮮停戦交渉に加わった経験をもつ練達の外交官であったばかりでなく、ゲッティンゲン大学で博士号を取得したヘーゲル学者でもあった。喬が国連総会でのスピーチのために来紐したのを機に、二人は初めて米国内で会うことになった。

キッシンジャー国務長官は10月3日夜ニューヨークのウオルドーフアストリア・ホテルのスイートでの夕食会に喬を黄華国連大使とともに招いた。哲学好きのキッシンジャーと喬には互いに響き合うものがあった。喬は何度もヘーゲルの名を挙げ、カントやシュペングラーにも言及した。

会谈では、キッシンジャーはPNW協定調印を擁護して、「われわれはあの協定を利用しようとしているのです」「もしソ連が貴国に対して何らかの軍事行動を起こそうとする場合、われわれは〔ソ連に対して〕協議を求めることができるのです」などと説明した。ソ連のイラクへの影響に対抗するためにイランへF-14、F-15などソ連より優れた武器を供与していること。ソ連（「貴国の北の友人」）はクルド人に対してイラク政府に協力するようにと大きな圧力をかけている、などとキッシンジャーはソ連“膨張主義”について喬の注意を喚起し、PNW擁護の発言をしている。

\* 日本への言及もなされた——

キッシンジャー——〔2月訪中のときに〕かれ〔毛主席〕は私が日本に十分な日数滞在しない、と叱られました。

喬——田中総理を支援して下さい。かれに（外交的）資産を与えて下さい。周総理は中国共産党大会での演説で、そして私は（今回の）国連での演説で、ソ連

50) Memorandum of Conversation Kissinger, Ch'iao Kuan-hua, Huang Hua Oct 3, 1973  
Waldorf Towers, NYC TOP SECRET/SENSITIVE/EYES ONLY 同上ファイル Box 94

の北方四島返還を求める日本の立場に支持を表明しました。

\* 中東戦争、「共同管理」、DEFCON III

73年10月6日(土)はユダヤ人の聖なる日、ヨムキプールだった。エジプトとシリアはこの日を選んでイスラエルを急襲。第4次中東戦争(10月戦争)の始まりである。しかし、ショックから立ちなおったイスラエルはやがて攻勢に転じた。ここで、米ソ共同の提案による国連安保理の停戦決議が出され、3国は受諾した。ところが、イスラエルがさらに前進したことにより、米ソ間に危機が生じた。24日、エジプトが米ソ両国に軍隊の派遣を要請。ソ連はこれを承諾、米国は拒否。ソ連は単独派兵の意志を表明した。米国は冷戦時代を通じて、ソ連の中東進出を許すつもりはなかったため、25日早朝、全世界の米軍をDEFCON IIIの状態に置き、核戦争の警戒態勢(アラート)を発令した。戦争に訴えるつもりのないソ連は決定を撤回した。ニクソンは、この危機をキューバミサイル危機に準え、「行動せよ」と命じた。これを受けて、キッシンジャーや側近、それに国防長官、統合参謀本部議長らが上記の決定を行った。この間、ニクソンはウォーターゲイト事件で精神的に消耗しており、アルコールには強くない体質にもかかわらずホワイトハウスの居住空間で昼間から酒に浸り、電話でも呂律の怪しい状態だったとされる<sup>51)</sup>。

この10月25日夕刻に、キッシンジャーは黄鎮に会った。黄は、「2超大国」の行動に異議を申し立てると同時に、親アラブ姿勢も明らかにした。“大国の責任”については、同じ10月25日正午の記者会見で、キッシンジャーは「米ソは言うまでもなくイデオロギー上の、そしてある程度、政治上の敵対国である。しかし、両国はまた非常に特殊な[共同の]責任も有する」と明言した<sup>52)</sup>。

当時、米国内では左右両陣営からデタントへの批判が絶えなかった。キッシンジャーはそのことを意識しながら、中東戦争で米国のとった行動を範例としながら、デタントを擁護した。「戦争は回避された」「中東においてソ連の影響を減じ

---

51) Kissinger (1982) 581-593; Isaacson (1992) 259, 263; Lebow and Stein (1994) 247, 480-481fn 125 など

52) Kissinger (1982) 594

るか、可能ならば、取り除く米国の政策は、デタントの名の下で進展している」  
「デタントとは友好関係ではなく、敵対国同士の関係についての戦略にすぎない」<sup>53)</sup>。

キッシンジャーの出発に先立つ中東戦争のさなかの10/11/73付でロードからキッシンジャーに宛てたメモランダム“Your Trip to China”がある<sup>54)</sup>。キッシンジャーの国務長官就任に伴って、NSCから国務省の要職に移ったロードだったが、やはりNSC時代と同じく、キッシンジャーの側近として仕えている。

このメモランダムで、ロードは米中関係の新たな動きについて、的確な分析を施している。

まず、二国間関係が「分水嶺」(a watershed)に差しかかっていると断定。その3つの背景要因を挙げた。

- (1)ニクソン政権内の混乱——ウオーターゲイト事件。加えて、アグニュー副大統領が知事時代の収賄事件の発覚により10月10日に辞任
- (2)米ソ関係の進展——われわれは三角関係の綱渡りをしてきた。(今回の)ブレジネフ訪米とPNW協定は中国に不快感を与えている筈
- (3)中国指導層内の論争(イデオロギー闘争)——周は厳しい攻撃に曝されている。

以上に加えて、カンボジア問題などが、中国の冷やかな対米態度を生み出し、長官閣下の訪中の遅れにつながった。

今後の国交正常化のシナリオとしては、周の訪米とそれに応える大統領の(2度目の)訪中が望ましい。正常化は74年9月を目途とし、75年春に実現[ロードは、ウオーターゲイトへの見通しを誤ったことになる]。

キッシンジャーの中国での行動については、留守役のNSCのスコウクロフトを介して、大統領に報告されている。

53) Kissinger (1982) 507, 594, 600, 980. DEFCON III やアラートについては、過剰で危険な反応だったとの厳しい批判もある。例えば、Lebow and Stein (1994) 251

中東戦争について、基本的に米ソデタントが、より具体的には、「基本原則」(1972)やPNW (1973)の第2条が米国のアラートなどにもかかわらず、米ソ間の直接対決を防ぐことに役立った、との評価もある [Garthoff (1994) 438-440 など]

54) To Kissinger from Lord “Your Trip to China” Oct 11, 1973 TOP SECRET/SENSITIVE/EXCLUSIVELY EYES ONLY 同上ファイル Box 100

帰国後のキッシンジャーからニクソンへあてた報告書(11/19/73付)ロードとハメル作成の「長官閣下が北京で約束して Action に移すべきこと」(11/24/73付)がみられる。

スコウクロフト＝韓会議録および、このとき韓に手渡されたもので、北ヴェトナムの行動について米国側の懸念を表明したものも見られる。

キッシンジャーはアジア歴訪のあと北京に到着し、11月10日から15日にかけて滞在。その足で日本へと向かう。キッシンジャーにとっては6度目の訪中となった。今回は國務長官としての訪問だった。このことで、周とやや同格に近づいた格好である。周総理との会談に加えて、毛主席とも会談した。

周＝キッシンジャー会談にはブルースやインガソル(10/12/73に東アジア・太平洋担当國務次官補に就任、11/8/73に駐日大使を辞任した)といった大物も顔を揃えた。

今回のキッシンジャーのニクソンへの報告書<sup>55)</sup>では、毛が生气に満ちていたことが強調された反面、周については、間接的ながら、これまでよりは精彩に欠けると言わんばかりのトーンが示されている。[毛はウォーターゲイト事件がニクソンの力を弱めることを心配した。理解に苦しむ、ナンセンスだなどとも言っている。キッシンジャーに同席したブルースは、これまで幾多の欧州の指導者を見たが、毛に一番強い印象を受けたとキッシンジャーに語った]<sup>56)</sup>。実は、これがキッシンジャーの周との最後の公式会談となった。キッシンジャーのこれまでの随行者、とりわけロードは、周にかつての生气、才気が失われているのではないかと観察した<sup>57)</sup>。

この訪中の最後の晩餐会でのスピーチで、キッシンジャーは不用意な発言をしてしまった。毛主席と孔子とを結びつけたのである。周は平静を失った。周のそ

---

55) Memorandum for the President from Kissinger "My Visit to China" Nov. 19, 1973 TOP SECRET/SENSITIVE/EXCLUSIVELY EYES ONLY 同上ファイル Box 96

56) Kissinger (1982) 695

57) Kissinger (1982) 687-88. これから1年後にはキッシンジャーはナンシー夫人と(先妻との)子供たちとともに、中南海の湖畔にある迎賓館とも見紛う「病院」に周を見舞うことになる。Kissinger (1982) 696-97. それに先立つ74年7月に、ジャクソン(Henry "Scoop" Jackson) 上院議員は 周を見舞う機会を与えられたが、周は病が重いようであるとの感想をホルドリジ(USLO) 副所長に語っている。周は1/8/76に77歳で没した

のような姿を見るのは、キッシンジャーにとっては初めてのことだった<sup>58)</sup>。中国国内では翌年にかけて「批林批孔運動」が高まりつつあった。林彪と孔子とを批判するものだが、孔子は対米協調路線を進めるとくに周へのあてつけだった。この左翼からの攻勢で、周の政治的基盤は（周の体力とともに）弱りつつあったのである。

ニクソンはキッシンジャーの報告書に丁寧に通した様子が、かれのひいた下線や手書きの余白への文字から窺える。例えば、「かれら [中国] の重要な計算は米国が [ソ連にとっての] 対抗力としてブレなく強力であることです」には下線と、「K [キッシンジャーのこと] ——これが鍵だ」との手書きがある<sup>59)</sup>。

中国滞在中、キッシンジャーは毛と1度、周と7回の会談を行った。内容的には2月訪中のときとさほど違わない。ただ、ウオーターゲイト問題への中国側の不安が増大していることは明瞭に読み取れる。なぜ、米国内でこんなことが大々的な問題になるのか理解できないようである。11月12日にキッシンジャーは毛に謁見<sup>60)</sup>したが、毛はウオーターゲイトについて不満を漏らし、「バカげている」と表現した。米国が強くてほしい、ニクソンが任期を全うしてほしい、そして国交正常化を早く達成してほしい、との毛の気持ちの表れである [結局、ニクソンは8/8/74に辞任。現職大統領の辞任は米国政治史上初のことだった]。

キッシンジャー —— 対ソ関係についてはすべてお話ししています。ソ連は米国と世界を共同運営をしているとの印象を与えようとしています

毛 —— ソ連は中国を攻撃してくる可能性がある

キッシンジャー —— 最初の頃は、それは単なる理論上の可能性として考えてきましたが、いまや、現実的可能性だと思うようになりました<sup>61)</sup>。

毛 —— 中国の核兵力はこれっぽちの蠅ぐらい (笑)

58) Kissinger (1982) 696

59) Memorandum for the President from Kissinger "My visit to China" Nov.19,1973 TOP SECRET/SENSITIVE/EXCLUSIVELY EYES ONLY NSC Files, Country Files. Far East Box 96

60) Memorandum of Conversation Mao Tse-tung, Chon En-lai, Kissinger, Bruce, Lord Nov 12 1973 Chairman Mao's residence, Peking TOP SECRET/SENSITIVE /EXCLUSIVELY EYES ONLY 同上ファイル

キッシンジャー——しかし、ソ連は〔中国の〕いまから10年先のことを恐れているのです

(ここで、毛はソ連が東方へ勢力拡大をしていることを仔細に述べる)

キッシンジャー——もし欧日米が結束すれば、中国への攻撃の危険性は極度に低下します

毛——日本の態度も適切だ (good)

次に日本に関する部分について——

毛——今回は、日本に行って数日間多く滞在される

キッシンジャー——主席はいつも日本のことで私を叱る。主席の仰しゃるよう今回は2日半滞在します〔キッシンジャーの訪日は、11/14-16/73〕。日本が孤立して置き去りにされたと感じないことが重要です。日本が色々な誘惑のなかで、策を弄 (maneuver) させてはいけない

毛——ソ連側に追いやってはいけない

キッシンジャー——米国との間で、多くの選択肢を持たせてもいけない

……

ここで田中の訪米 (7/31-8/1/73 ワシントン) とそのあとの訪ソ (10/7-10/73) に話題が移る。

キッシンジャー——訪ソの前に田中はワシントンへ行った。日米関係は先に私がお邪魔したとき〔73年2月〕より良好になりました。かれらはもうそれほどおどおどして (nervous) はいない (笑)

毛——かれらは貴官を恐れている。その恐れを減らしてやるべきです。ソ連は必死になって日本を自分の方に付けようとしている。しかし日本はソ連を信用してはいない

キッシンジャー——その通りです。歴史的体験です。われわれにとっては幸いなことです。またロシア人の気性は日本人とうまく合いません。

周——田中の訪ソ中、ロシア人は愚かに振舞った

---

61) Kissinger (1982) 233 に、ブレジネフは中国人を「人食い人種」と呼んで攻撃した。「なんとかしなければならぬ」とも口にしたことが記されているので、この毛の発言はあながち誇張ではないかもしれない

毛——最初の2日間は何の話し合いもしなかった

周——説教をした

毛——ソ連の資源に関する提案だけしかしなかった

キッシンジャー——そうです。米国に対してもそうでした [ブレジネフ訪米は73年6月] われわれは買ったがっているとの印象を与えます。ところがその提案なるものが、向こう10年間投資し、すべてが建設されたあとで、ソ連が支払いを始める(笑)。米国は何の合意もしていない。ソ連の大プロジェクトで早い合意は無理です。

キッシンジャーの北京到着(11月10日)の夜、歓迎晩餐会が催された。このあと、35分間ほど周=キッシンジャー会談が行われた<sup>62)</sup>。

\*周は日本に言及。

周——かれら(ソ連)は絶えず日本を自分の側に近づけ、われわれ(中国)から引き離そうとしている。かれらは、米日を完全に引き離すことが出来ないことを知っているが、少なくとも日本を米国よりも自分たちの方へ近づけたいと願っている

……

周——われわれは日本側に話したのですが、もしシベリア開発を望むのならば、単独でよりもあなた方(米国)と共同してやる方が良いと。田中総理は貴官がかれに会うときにその話をするでしょう

キッシンジャー——同様の意見です

周——……恐れているのは、日本がソ連に取り込まれてしまわないかということです

(翌日(11日)の周=キッシンジャー会談<sup>63)</sup>でも日本への言及がある)

キッシンジャー——日本は重大な時点に差しかかっている。より伝統的なナシ

---

62) この会談録は Burr (1999) 170-173 に収録されている

63) Memorandum of Conversation Chou, Kissinger, Bruce, Ingersoll, Lord Nov. 11, 1973  
TOP SECRET/SENSITIVE/EXCLUSIVELY EYES ONLY NSC Files, Country Files, Far East Box 100

ヨナリズムへ走るか、それとも現状のままの外交姿勢を保つか、の選択の必要に迫られている。多くの誘惑がある。中東の石油情勢にも大きく影響されます [中東戦争は 10/6-24/73] ……

キッシンジャー——ソ連からの誘惑もあります。日本自身の強い経済力から来る誘惑もあります……

(11/14の周=キッシンジャー会談)<sup>64)</sup>

周——(11日に)貴官は(日本の)2つの選択肢を語られた。3つ目の選択肢もある……米国の核の傘なしには、日本は別の [ソ連の] 核の傘に入るでしょう。(こうしたことを)させないように米中が力を合わせなければならない

[会談の途中の休憩時間にキッシンジャーの側近がトイレに入ると、周が注射をされている姿を見た]<sup>65)</sup>。

キッシンジャーの訪中の予定されていた7月に興味深い電文がブルース所長の名で北京のUSLOからキッシンジャーへ届いている<sup>66)</sup>。

中国側は米国に対して、日本を冷たく扱わないよう熱心に忠告している。しかし(これまでの歴史的経緯、西洋から受けた屈辱や搾取を決して忘れてはいないので)二国間に心からの結びつきはありようがなく、便宜上の結びつきがあるのみ。

これは日中関係の核心を衝いた言葉である。

## XII 中国の世代交代

鄧小平=キッシンジャー会談<sup>67)</sup>

1974年4月14日のニューヨーク。ウォルdorfアストリア・ホテルの国務長官専用スイートで、鄧小平(Teng Hsiao-ping)を夕食会に招き、会談が行わ

---

64) Memorandum of Conversation Chou, Kissinger, Howe, "Japan, Congress, Pakistan" Nov 14, 1971, Peking 同上ファイル Box 96

65) Tyler (1999) 169

66) To Kissinger from Bruce July 11, 1973 Peking 015 "Your Visit to Peking" TOP SECRET/SENSITIVE/EXCLUSIVELY EYES ONLY NSC Files, Country Files, Far East Box 95



れた<sup>67)</sup>。その準備のための2種類の文書(ともに4/12付)がある<sup>68)</sup>。両文書ともに、アンガー(Leonard Unger)がキッシンジャー国務長官の推薦で、駐台米国大使に2月に任命されたこと、また、米国内に台湾の総領事館の数が拡大したことが、対中関係の懸念材料として挙げられている<sup>69)</sup>。

鄧は国際開発に関する国連総会でスピーチを行うために来紐した。かれにとっては最初の渡米であり、副総理で党政治局中央委員会のメンバーである鄧は、米国にとっては、これまでで中国の最高位の人物だった。文革による不遇を託っていた鄧に毛主席は謝罪をして副総理として“復権”させたことが知られている。鄧はまた党軍事委員会メンバーという有力な地位にもあった。

そうした事実にもかかわらずキッシンジャーには当初、鄧に会う予定はなかった。たまたま、キッシンジャーも国連総会でスピーチをするため、ニューヨークに行くことになり14日に鄧との会談が急遽設定された[キッシンジャーのスピーチは翌15日に予定されていた]。

このことに対する意趣返しかどうかは別として、鄧一行は意図的に予定より10分遅れてホテルに到着した。鄧は喬冠華外交部副部長と国連代表の黄華を同伴した<sup>70)</sup>。

会談内容には特筆すべき事柄は見出せない。キッシンジャーは回顧録でこの会談には一言も触れていない。

日本に関する部分が1箇所ある。鄧がシベリア石油開発を例に挙げながら、ソ連の東方への戦略的意図を指摘した。そして、日本人は中国人の気に障らないよう気を遣うのみで、ソ連の真の意図にまで思いを致していない、と批判した。こ

67) Memorandum of Conversation Teng, Ch'iao, Huang, Kissinger, Sisco, Scowcroft, Lord, Hummel "Secretary's Dinner for the Vice Premier of the PRC" Apr. 14, 1974. Secretary's Suite, Waldorf Astoria Hotel, NYC TOP SECRET/SENSITIVE/EXCLUSIVELY EYES ONLY 同上ファイル Box 96

68) Department of State Action Memorandum to the Secretary from Lord/Hummel "Your Meeting with Teng Hsiao-ping and Chiao Kua-hua" Apr 12, 1974 TOP SECRET/SENSITIVE/EXCLUSIVELY EYES ONLY; Memorandum for Secretary Kissinger from Solomon "Political Background Analysis of Teng Hsiao-ping" Apr. 12, 1974 TOP SECRET/SENSITIVE ともに同上

69) Tyler (1999) 176 も参照

70) Burr (1999) 317 fn 317

れに対して、キッシンジャーはおだまりの持論を展開した。「日本人は戦略的思考をすることがまだ出来ません。経済的なことしか考えない」と。

このあと、鄧はウオーターゲイトで何を大騒ぎするのかと、中国指導部の不満を代弁した。また、儒教のことを話題にし、「もし（中国）人民のイデオロギーを古い思考から解放することを望むのならば、儒教を排除せねばなりません。このことが、人民の考え方を解放する動きになるのです」と述べた。明らかに「批林批孔」運動を念頭に置いた発言だが、文革で辛酸を嘗めた鄧としては、自分に降りかかってくるかもしれない批判であり、きわどい発言であろう。

夕食会が終りに近づく頃に、鄧はやっと最重要課題である国交正常化と台湾問題を持ち出した。キッシンジャーが意識して話題にしなかった問題である。この時より以前に鄧は日本人外交官に、当分、米国は国交正常化に動かないだろう、と不満を述べたと伝えられている。鄧は、言い訳じみた発言をするキッシンジャーに対して、「日本方式」（＝台湾との断交）による解決しかありえないことを強調した。

### XIII おわりに

デタントは早くも70年代後半に退潮に入った。ソ連の「第3世界」への進出を米国は「リンケージ」政策で喰いとめること出来なかった。ソ連のアフガニスタン進攻（1979年12月）は米ソ関係を決定的に悪化させた。その間、カーター政権のもとで米中の急接近が見られる。反ソ意識の強いブレジンスキー大統領補佐官の意向が反映されたものである。

中国側が待ち望んでいた米中国交正常化はやっとカーター政権のもとで1979年1月1日に陽の目を見た。中国側の正常化のための3原則を米国側が認めた結果であった。(1)米国が台湾と断交する、(2)米軍が台湾から撤退する、(3)米台防衛条約を破棄する。しかし4月10日にはカーター大統領は議会で成立した台湾関係法に署名した。台湾への配慮の表れであった。

[後記] 中国語の固有名詞のローマ字表記について――

本稿では史料原文に表れる「Wade—Giles 方式」をそのまま踏襲し、「拼音 (ピンイン) 方式」に変換することはしなかった。

### 参考文献

- Barnet, Richard J., (1983) *Alliance* New York: Simon & Schuster Inc.
- Bundy, William (1998) *A Tangled Web* New York: Hill and Wang
- Burr, William ed. (1999) *The Kissinger Transcripts* New York: The New Press
- Dobrynin, Anatoly (1995) *In Confidence* New York: Times Books
- Garthoff, Raymond L., (1994) *Détente and Confrontation* (Revised Edition) Washington D.C.; The Brookings Institution
- Goh, Evelyn (2005) *Constructing the U.S. Rapprochement with China, 1961–1974* New York: Cambridge University Press
- Haig, Alexander M., Jr. (with Charles McCarry) (1992) *Inner Circles* New York: Warner Books
- Hoff, Joan (1994) *Nixon Reconsidered* New York: BasicBooks
- Holdridge, John H. (1997) *Crossing the Divide* Lanham, MD: Rowan & Littlefield Publishers Inc.
- Hyland, William G. (1987) *Mortal Rivals* New York: A Touchstone Book
- Isaacson, Walter (1992) *Kissinger* New York: Simon & Schuster
- Kissinger, Henry A. (1964) *A World Restored* New York: Grosset Dunlap
- Kissinger, Henry (1979) *White House Years* Boston: Little, Brown and Company
- Kissinger, Henry (1982) *Years of Upheaval* Boston: Little, Brown and Company
- Lankford, Nelson D. (1996) *The Last American Aristocrat* Boston: Little, Brown and Company
- Lebow, Richard Ned and Janice Gross Stein (1994) *We All Lost the Cold War* Princeton N.J.: Princeton University Press
- Lilley, James (with Jeffrey Lilley) (2004) *China Hands* New York: PublicAffairs
- Lynch, Allen (1992) *The Cold War Is Over—Again* Boulder, CO: Westview Press, Inc.
- Nelson, Keith L. (1995) *The Making of Détente* Baltimore, MD: The Johns Hopkins University Press
- Nixon, Richard M. (1978, 1990) *RN: The Memoirs of Richard Nixon* New York:

Simon & Schuster

Schaller, Michael, (2001) "Détente and the Strategic Triangle Or 'Drinking your Mao Tai and Having your Vodka, too'" Robert S. Ross and Jiang Changbin, *U.S.—China Diplomacy 1954–1973* Cambridge, MA: The Harvard University Asia Center

Shevchenko, Arkady N. (1985) *Breaking with Moscow* New York: Ballantine Books

Tyler, Patrick (1999) *A Great Wall* New York: PublicAffairs

Zhai Qiang (2000) *China & the Vietnam Wars, 1950–1975* Chapel Hill: The University of North Carolina Press

井上正也 (2010) 『日中国交正常化の政治史』名古屋大学出版会

合六強 (2011) 「冷戦変容期における大西洋同盟 1972–74 年」『国際政治』164 (February 2011)

李東俊 (Lee, Dongjun) (2010) 『未完の平和——米中和解と朝鮮問題の変容 1969–1975 年』法政大学出版局